国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

東京圖書館
和書門
地理類
九函
六架
二ノ號
二〇冊

124
20
114

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

東都名所圖

松濤軒長秋狷彩
七芳川雪旦圖畫

故楓原文庫紀本

楓原家藏

都名所圖會始出遠在余成童時一閱之即謂此書可以供卧游矣則江戸亦不可無是輯也後數歲聞諸酉山大久保翁有齋藤幸雄者有採勝之癖方撰江戸名所畨會採擇稍遍描寫頗

盡然獨病江戸稱名所者僅僅不足(レ)數(レ)指也余謂凡名所之稱本出(二)於咏歌者流蓋其設(レ)法謹嚴畫一縱令有山秀水麗(二)以吟咏(一)而其不(レ)為(二)古歌所(レ)取者不(レ)得(レ)稱(二)之名所(一)是其下以雖(三)世有(二)

汙隆(一)要不(レ)失(レ)為(二)雅則(一)也然名者實也實者主也主豈可(二)以賓加(一)賓之撰非(二)惟所(一)謂名所而已神祠佛寺溪澗(二)幽勝者亦網羅而不(レ)遺乎矧復江戸之為(レ)地誕(一)漫陌綺街事涉(二)猥瑣(一)者亦網

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

武野之曠秩類之峻濕深之永
玉川之澄絡繹邦域霞關思濛
之宜春真土菴畸郊坰其勝殆不讓上國乎是亦
何病之有翁頷而是之既而幸
雄没翁亦尋逝終不知其成否
然而秋里氏所著拾遺輿咏河
泉攝及一二諸州名所圖會者
陸續上梓盛行於世余於是乎
悵然恨牽雄之輯慾期失時而
又聞其男幸孝善継未公於世幸
三索蒐聚滋廣猶

孝亦以文化戊寅沒又遺托之
男幸成幸成泣受之黽勉不怠
校讐極力竟竣其功閒者幸成
寖然抵門通刺出其全帙示之
且需序言是蓋由余注日介人
促其成也余乃一閲三歎追念
與冏山翁言三紀於茲喜悲交
集又憾幸雄幸孝與冏山翁皆
不觀其完成矣然其所以歷年
若此其久者敬慎遺托不敢輕
舉則死者而有知必曰予子若
孫相續能成吾志矣抑畜之

撰。固供卧游。亦以充童觀。非所以專示大方。若夫覽雅馴。則可謂不知類矣。余更為作者分疏其由云。

月冠山松平定常撰

河内三矣書言

海内地名。著於古人和歌者宗祇
聳月之徒。攬而輯之。稱之名所。
之險易。風俗之淳窳。名物之同異
可坐而識也。吾江戸名所。顯於古人
和歌。而賅於當今者不少矣。爰應
川。詳布。著於延喜式。霞關載於
武藏風土記。拠兹井彙於紀實

之僧西行之歌。皆名吟之顕於古
而今失其跡者也。及考古士。
而訪之。林巒再啓其岡焉。泉石
再炊香亭焉。我無勝情者則不
能也。蔡藤幸雄有勝情矣。有
徐具矣。江戸、勝區名譽。棄於榛
叢荒墟、可嘗。而不可識名。搜紀
舊碑。又自史傳地誌。諸書名所
和歌。紀行之書。以及稗説野乗。
苟為足以資考鏡者。元博採
綜括。蘭薈於漂論不可問之蹟
為。其名所則著之繪事。收山河
於筆端。亦
谷。披窮林或訪之古老或徴之

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

心當卧遊矣。於是百年湮晦之
徐區。英雄百代之故壘。名士騷
之芳躅。槩然而復炫其奇矣。所
謂物之顯晦。自見待人以棄去駘
宕。未及就業。遂疾而逝。識者
惜之。嗣子韋孝克紱緝交已久。
未倦。余先人與韋孝締交已久。
笑。嘗約爲之序。而未果。孝寧年不永。
亦徐痛惋也。及乞余述
於性去厚。而可寧於韋去獨乃殊。
以一人而任二世之編。乃聿脩
採掇亦博。而補輯悉審。契勘必
當。始克成斯浩瀚之編。乃聿脩

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

ろ人。近来無慨矣。乃走不徴序於
余。可云余先人易簀。蓋八稔矣。而余
薄技浪代先人之任。大方之消。
固所不免也。天保癸巳春三月
江戸　龜田長梓謹識

牧野信之

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

凡例

凡此編の次序ハ大城を以て首とし除ハ東方ヨリ回環する
近北斗七星の位ヲ配當ゑて都て七巻を以て全部とす
凡江戸の地ハ廣大豪壮ゆゑに名流高士の芳蹤ハ蘚遊と
して史冊を照曜し琳宮梵剎ハ林の如く聯りて悪く枚へ
挙るヲ遑あらず故ゆゑに由致ひるて撰て録と或ハ俗説
亡ひて證とゑうるよハ土人の口碑ヲ存するりのを取て證
とし或ハ古根の浮説ゆゑて妄ヲ渉るこのハあれと省く
能りと雖人口ヲ膾炙して伝称のゆゑ今猶ヲ添削
評騭を加ふるヲ能ずしてヲ姑くそのまゝを載を大伽藍と雖
も棄歴事実を亡失ゑて詳ふまる事能ずして見ヲ知る人の
誹遠勧誘のりよハ悪くまれと願きて没古博物の士ヲ訪ひ
他日後輯の成るヲ乃ひて附載せんと欲するのミ

凡方位を示すハ茶位ヨ循ヒ葉の東西南ハ荏ト
又左右トハその地ヨ向ヒテ左右ト云覧るもの
ハまを推て標準とせよ
凡引用の書全文を載せすして
摘まるものハ紙負堵多ハ
悪るき為ヨ非ス社仏刹ハ
諸什器の類神寺附舎ハ渉りて
寺僧の言ひ伝ふる所ハ任せ
備書ヨりを雖古来より世ヨ
用ゐその取捨ありてハ覧る人の意ハ
凡神社仏閣の幅員方域を圖するハ
模写ハ且地ヨの間ハ時遊観の形勢を
風俗按師容儀ハ亦茜今の形容を
りのハ各時を分てり是ヨ地の風光を
東都盛大の繁栄るを知らん為めなり

凡此地名所の中武蔵野隅田川二巻ハ
隅田川ハ女岸ハ分ちて六七の二巻ハ
雲間ハ鐘ヘ東岸ハ筑波の翠巒
縦観の美ハ地ハ停まるハ依て
ハ巻と対照して全局を
凡真間の舊跡ハ下総の地ヨして
利根川を隔つるをもて実ヨ
文人墨客吟筆を頁ひて遊節
第一の壮観とハるハ於て
ハ地ヨ内ハ收ム覧るハまを

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

附言

此書ハ祖父ら寛政中ヨリ編ミ初メて父縣麻呂ら刑補文化の末ツカタ
なゝを文政の今ふ玉て上梓の功を終ふねん年序を經ふ三十有余年
江都蕃昌ふ隨て神社寺院境地沿革十ふりの頗多ー一向の小祠も
須臾ふ壯嚴ふる大社ふりを繪の神菴も巍然ふる莊嚴をかゝれる
ものおゝゝ戊ハ祝融の災ふ罹りて樓門回廊と燒失ー礎石のミ
存ふるの類無慶校挙すんふ遂りとゝも時ゝ見と改ふる等依
右ふ今時の躰よ差ふるものふ多ー見るりのいふふるるかれ

齋藤月岑識

江戸名所圖會卷之一

天樞之部目錄

武藏國號基　日本武尊移父岩倉ふ武器と收ふ圖
江戸始元　江城興基
元旦諸侯登城圖　吹上御庭
八代曾河岸　龍の口　平田門蒲生飛彈守宅地
洲籠橋　常盤橋
天王御旅所　大傳馬町　小舟町
浮世小路　一石橋　八橋一覽圖　橋本の巻
十軒店　同雛市　通町　數寄屋町三井呉服店　大傳馬町　本町藥種店
本石町時の鐘　道三橋
福田村舊址　白雜樹荷祠　日本橋　同魚市
永代田村舊跡　本銀町土手
今川橋　土水井　下鮫洲
護持院舊地　荒洲　總蜂橋　深川佐賀町
神田明神舊地　魚板橋　世継稲荷祠
飯田町　中坂　九段坂
神田橋　濱倉町　濱屋敷
小川町基　小川町　神田川
藥土明神舊地　御茶の水

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

水道橋　駒込吉祥寺旧地　三崎稲荷祠　大曲坂

昌平橋　大田姫稲荷祠　藍染川　類焼茅師

於玉ヶ池稲荷　駿河台

馬喰町馬場　東漸寺境内絵馬

柳橋　茅屋町

両国橋　堺町　中村座　葺屋町　市村座　別の図

歌舞妓芝居　根津権現　四方赤不田地

新大橋

中橋

永田馬場　山王御旅所　同祭礼の図

清水如水宅地　大門

吉原町旧地　大門通　江戸橋　本更生の図

天王御旅所　同祭礼

霊巌島　霊巌橋

永代橋

佃島　白魚網

鉄砲洲

湊稲荷社

加賀公邸　前田屋敷

日本橋　魚市　五色幕

檜物町　中村座　別の図

葺屋町　市村座

三派

伊雑太神宮

新川太神宮

恵比須稲荷社

天満宮

了然禅尼菴室地

江風山月楼

来女系　来女井

新橋

三縁山増上寺　本堂　三門　宗廟　極楽橋　円堅松　山門　大門　柵門

日比谷稲荷祠

三ツ橋

新川酒問屋圖

湊稲荷社

駿河臺

神田川

神田橋

筋違橋　八小路

丹後殿前

柳原　土手　柳森稲荷

柳原　蓬莱橋　和泉橋

和泉橋　川岸　柳原土手

和泉橋　川岸　筋違橋通

佐久間町　河岸

和泉橋通

柳森稲荷社

沙華橋

佐久間町　河岸

和泉橋通

佐久間町　河岸

和泉橋通

佐久間町　河岸

和泉橋通

三田
綱坂 雀陽水 綱塚
春日明神社
功運寺
飛塚
行四子藥師堂
高輪下
稲荷祠
高山稲荷社
小山神明宮
三田八幡宮 聖坂
月波樓
濟海寺
竹葉寺舊址同古事
魚藍觀音堂 潮見坂
高輪大木戸 七月廿六日祭禮之宮
如来寺 御影堂
泉岳寺 太子堂庚申堂
常光寺
寶冠寺 子安觀音 弁才天
東禪寺 有栖川 八幡宮
釈神社
谷山

武藏 東海道ニ屬ス和名類聚抄曰牟佐之國府多磨郡ニ在ト云ク武藏國上古ハ東山道ノ内ニ入ル光仁天皇ノ宝亀二年辛亥冬十月己卯大政官奏ス東海道ニ屬セシムヨシ續日本紀ニ見エタリ

橘樹 荏原 豊島 足立 新座 入間 高麗 比企 横見 埼玉 大里 男衾 那珂等ノ三郡ヲ加ヘ葛飾ヲ除テ共四郡トシテ詳ナリ貞享三年丙寅三月利根川ノ西ヲ割テ武藏國ニ屬セシヨリ昔ハ本所葛西ノ辺浅草ノ川ヲ國界トシテ川より東ノ地ハ一圓ニ下總國ナリシヲ右ニ云ク今ハ葛飾郡ノ半ヲ割ク利根川ノ以西ヲ武藏ノ國ニ屬セシヨリ今是ヲ加ヘテ二十二郡トス和名抄ニ武藏國管二十一トアリテ葛飾郡ヲ葛餅郡トシ東ヲ下總ノ國ノ葛餅郡トシ訓ヲ同書ニ多磨モ多波ト訓シ止志加ト訓ヲ同書ニ多磨モ多波ト訓シ

橘樹 荏原 豊島 足立 新座 入間 高麗 比企 横見 埼玉 大里 男衾 那珂等ノ三郡ヲ加ヘ葛飾ヲ除テ共四郡トシテ詳ナリ貞享三年丙寅三月利根川ノ西ヲ割テ武藏國ニ屬セシヨリ昔ハ本所葛西ノ辺浅草ノ川ヲ國界トシテ川より東ノ地ハ一圓ニ下總國ナリシヲ右ニ云ク今ハ葛飾郡ノ半ヲ割ク利根川ノ以西ヲ武藏ノ國ニ屬セシヨリ今是ヲ加ヘテ二十二郡トス和名抄ニ武藏國管二十一トアリテ葛飾郡ヲ葛餅郡トシ東ヲ下總ノ國ノ葛餅郡トシ訓ヲ同書ニ多磨モ多波ト訓シ止志加ト訓ヲ同書ニ多磨モ多波ト訓シ

古事記牟邪志ニ作ル舊支記胸刺ニ作ル萬葉集ニ牟射志ニ作ル同クむさしト称セシヨリ

其義ハ風土記抄ニ武藏の國秩父の嵩ハその勢ひ勇者の怒り立ルヲ以テ日本武尊此山ニ東夷征伐の祈願をこめゆひその後東夷盡く平治せしかその武器を秩父岩倉山ニ納めおさめしよりくこの國をむさしと称せしとなり其後 称徳天皇の神護景雲二年武藏の國より白雉を献ルヲ以テ卿の奏せし言ニ載武蔵の字を以嘉名とおぼしめすよりて此國を武蔵の字を以嘉名とおぼしめすよりて

續日本紀称徳紀云神護景雲二年六月癸巳云武藏國橘樹郡人飛鳥部吉志五百國於

日本武尊東夷征伐の時武具を納め給ひし
岩倉山ふもと也
是武藏國号の濫觴なり

倭健戎容猛
征西又伐東
腰間十束劒
草薙偃威風
春齋子

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

同國久良郡獲白雉献焉即下郡郷議之奏云雉者斯良臣一心忠貞之應
白色乃聖朝重光照臨之符國号武蔵既呈武崇文祥とあるハ
并邪志の三字を好字よ改め二字よ定めし武蔵と書て志の文字を畧れ
しより此白雉の瑞ふつゝそ武蔵の二字を祝して奏しゝる詞より今の名ありとあり

東照宮様當國よ大城を志め鴻業の基を開きたまひしより
四海竟よ干戈の労を忘れ万民長よ太平の化ふ浴せるを乃是
天意のあらゝむる所ゆゝそ國の號も自ら昇平の御代ふ應しゝるものゝ遠ゆてあとゝとめ

家集　物名むさゝ

枝打せむさゝてゝよわゝゝのこの

江戸　豊嶋郡峡田領とゝ其封境往古ハ廣くありしに似たり
白石先生の説よ江戸ハ庄の名ありゝ云云按よ中古庄と唱へゝハ郷の
郷里共よ佐登と訓を今義解云凡五十戸為里と云く然る時ハ佐ハ狭登ハ処の畧ふ
して廣大なるの意ふ武蔵國風土記よ荏土ふ作る傳云此地ハ大江よ臨
とりゝく云ゝゝ
故ふ江戸と称せりとの
ある時ハ江戸の地ハ千頃ありとあるも上の意よ
ひとしゝそのあゝへの封域今のめくふ廣大ありしゝ
洪居城の地となりしゝ故ふ日を重ね月を追ひ益繁昌ふ
今ハ経営拾里よ垣めぐらし都ゝく江戸と称せり萬國列侯の藩
邸市廛商賈の家屋鱗差して縦横四衢よ充満し万戸
千門甍を連ねゝり実ふ海陸の大都會ゆて扶桑第一の名境といふ

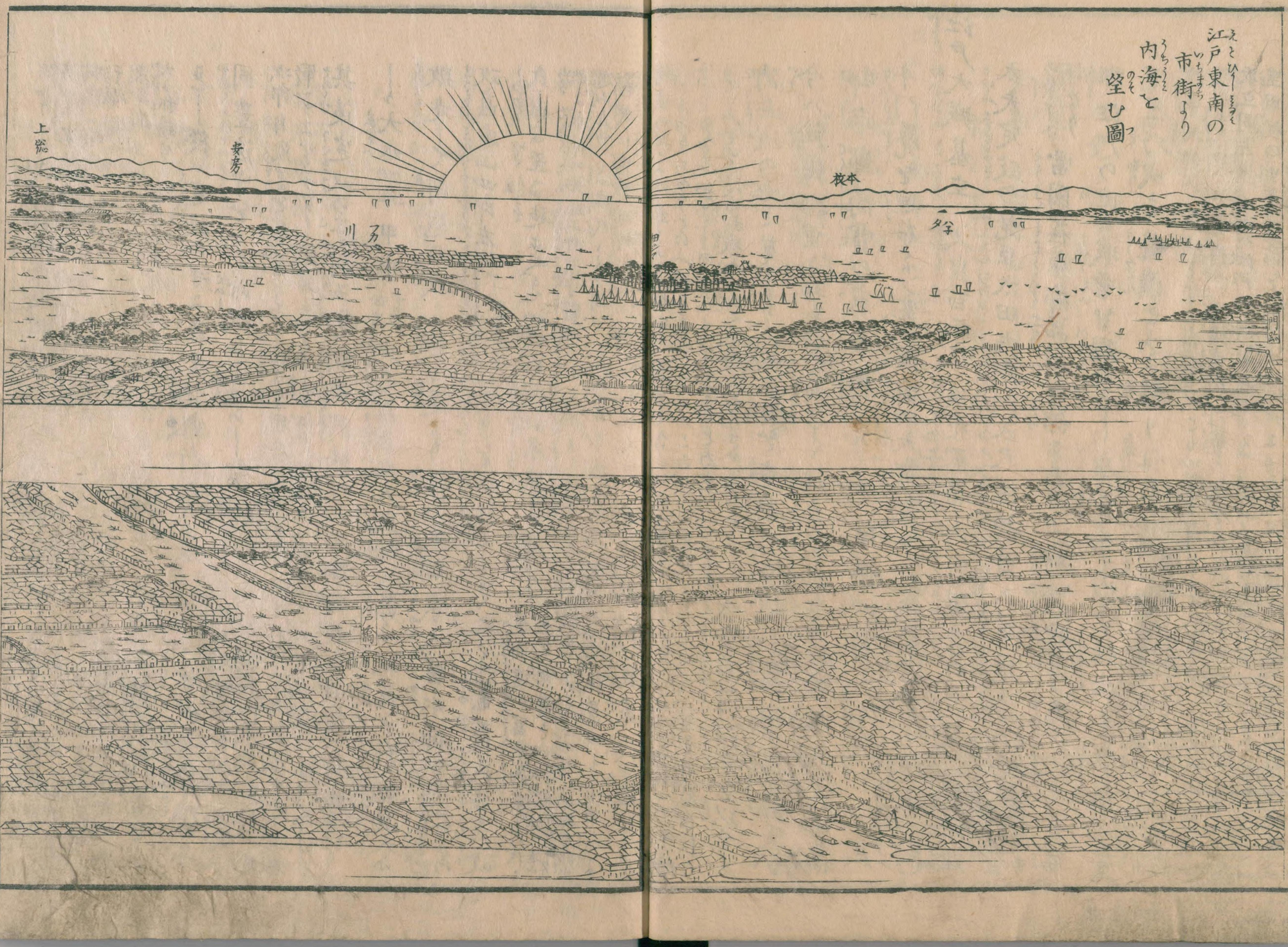
江戸大城基立　人皇百三代　後花園帝の御宇鎌倉の官領上杉修理
太夫定政の老臣太田左衛門太夫源持資入道道灌
の条下ふ詳なり　當國荏原郡品川の館よありしゝ時勝地ある方を以ゝく豊島
郡江戸の地よ城営を開むとし康正二年丙子経始し長禄元年
丁丑巧成ゝく道灌ゝよ移り住を
持資相継ゝく居城とすとゝもいふ
四月上杉修理太夫持朝入道武州河越の城を
取立同左衛門太夫ハ江戸の城を取立ゝるとゝあり
宝田祝の里とゝもゝく城地ふとゝめを又一説よ千代田森田宝田等の三

河城の号ふ呼れゝより彼地の惣名とゝる江戸の
枝のあつまりとゝもゝくむさゝの一冊子よ称へゝるも白雪の
ほとゝもゝくむさゝの江戸よつゝゝありとあるも上の意よ
ひとしゝそのあゝへの封域今のめくふ廣大ありしゝ
洪居城の地となりしゝ故ふ日を重ね月を追ひ益繁昌ふ
今ハ経営拾里よ垣めぐらし都ゝく江戸と称せり萬國列侯の藩
邸市廛商賈の家屋鱗差して縦横四衢よ充満し万戸
千門甍を連ねゝり実ふ海陸の大都會ゆて扶桑第一の名境といふ

江戸大城基立　人皇百三代　後花園帝の御宇鎌倉の官領上杉修理
太夫定政の老臣太田左衛門太夫源持資入道道灌
の条下ふ詳なり　當國荏原郡品川の館よありしゝ時勝地ある方を以ゝく豊島
郡江戸の地よ城営を開むとし康正二年丙子経始し長禄元年
丁丑巧成ゝく道灌ゝよ移り住を
持資相継ゝく居城とすとゝもいふ
四月上杉修理太夫持朝入道武州河越の城を
取立同左衛門太夫ハ江戸の城を取立ゝるとゝあり
宝田祝の里とゝもゝく城地ふとゝめを又一説よ千代田森田宝田等の三

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

江戸東南の市街より内海を望む圖



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

氏を築く武州江戸河越岩付等の不城墨と或ハ人名よりす大道寺文山翁云天正より以来ハ代田城と呼ひ西を含雪と唱へ城中よ遠所の望を望む軒の南を静勝と号く東を泊船と呼ひ西を含雪と唱へ東吳萬里舟を浮ふ頃ハ濯の詩よ應く万里居士江戸城よ入山水の美を眺望し窓含西嶺千秋雪門繫東吳萬里舟と古人の詩を引て然よ文明十八年丙午持資謚害せらる大よ称揚せり（杉此地の美景ハ江亭記の文中よ詳なり）

さ〻後ハ定改の手よ属を依執行なりける（鎌倉大草紙よ文明九年江戸の城に武藏志料曾我兵庫刀の子孫支配）

同豊後守をして此城を守らしむ

次郎自滅等を竜置とあり（杉山部少輔朝昌三浦助義同千葉上総介常胤等を攻る事ハ是等の人を居置しなるべし）鎌倉よ

其後定改の子同五郎朝良同修理太夫朝興共よ相續て此城よ

ありし大永四年甲申四月十三日北条左京太夫氏綱ろるよ政落され朝興大ひ

敗走して河越の城よ移る是より後ハ氏綱家人富永神四郎（小田原記）罷在氏政

改直遠山四郎左衛門（小田原記）某等を城代とせしよ

氏直よ至る迄さ〻四代の間北条家よ属す

（天正十八年庚寅秋七月其家没落せし是間遠山富永両家ハ代〻諸城を警護せし事ハ遠山永禄の始丹波守直景ハ北条治部丞綱重の墓よ戦死しなる天正の頃ハ北条家滅亡の頃遠山左衛門尉同十八年

より已来永く

御當家の御居城と定させられ同年八月朝日江戸の大城へ

台駕を移させ給ひ其頃迄も僅かの城営なりしを慶長年

間御城廓の地を廣めさせ給ひ唯今のごく巍〻然として萬世

不易の大城とハなりける

江亭記　寄題江戸城静勝軒詩序

武州江戸城者太田左金吾道灌世之雄也自兼三王命之安八州于内才公之鐃斧威愛相也公所肇築

州城之命之危係之十四郡唯武城之一人加焉以来鮮矣固一欽兼一夫州城之巨溝高墜微鐵崖泉懸之陸丈之備而軒峙其屬丈萬項之布

一州闢風流籍東與比公差肩者鮮矣固一欽兼一夫州城之巨溝高墜微鐵崖泉懸之陸丈之備而軒峙其屬丈萬項之布

以風流籍東與甚比公差肩者鮮矣固一欽兼一夫州城之巨溝高墜微鐵崖泉懸之陸丈之備而軒峙其屬丈萬項之布

舟立固之會他州綠碧架垣巨者異郡薮以一之人加焉以外爲有壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

一碧白爲中門脉峭舟車城之以會他州綠碧架垣巨者異郡薮以一之人加焉以外爲有壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

目瑠玉屋閣石瀦立固之會他州綠碧架垣巨者異郡薮以一之人加焉以外爲有壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

千璃屏踞其壜鄰以會他州綠碧架垣巨者異郡薮以一之人加焉以外爲有壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

里田風若其後磴其架径巨者異郡薮以一之人加焉以外爲有壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

野者于者西直望舎翼其盤爲十薮唯武城之一人加焉以外爲有壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

與南東視則則則逾原側右之里以郡唯武城之一人加焉以外爲有壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

海響則則浩阻墟落野而戍紆摛許加焉以外爲有壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

接則則浩阻墟落野而戍紆摛許加焉以外爲有壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

與乎原落野而戍樓聿以外爲有壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

天原連野而戍樓聿保外爲有壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

連野而瀛雪保障其壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

者寛瀛海嶺障其壘城之之爲出入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

是舒海蘸界庫壘入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

皆廣蘸天天廄公入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

公行天如如三三萬之廄公入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

几平蕪三萬之廄公入濬凌十地墟餘海陸之懸徽泉崖其屬丈萬項之布

案蕪茵萬項文屬其崖泉懸之陸丈之備而軒峙其屬丈萬項之布

閒茵布項文屬其崖泉懸之陸丈之備而軒峙其屬丈萬項之布

一布項文屬其崖泉懸之陸丈之備而軒峙其屬丈萬項之布

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

元旦諸侯登城之圖

藩邦玉帛此朝宗
關險何須百二重
四海通舍渤澥
中原嶽秀有芙蓉
城地日暖晴雲逈
邸第春分淑景從
回望蘭葱佳氣裡
車如流水馬如龍

服元喬

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

物斯萬凡月肯其而出合之餌室矣則氣窮躁不躁於缺公與者
斯以遊狀三之瞻南叢日沒旗之收慮其天衆旄々於入可兮皎焉如
以則凡拍斯東瞻之岡蕪海竹成躁地無騎成氣則靜而寒而非而
故一可瀛者變者商樹市卒不人而歌合雖勝不而非冲而守者知
軒之日翫天晨地紫烟旅以隶泉則熱鬼而詞失以其不冲熱而相爲
南名早者霞之近之大雲房聚爲常和太神清譬能正後於戰者花
静勝午雖之所而小之珠區吾矣者清弗淨如勝無也軒者咸老
晩之出互絢與獻腴際之宋犀有別成爲克躁熱唯所未不謂人
公東異更南遠旁城帆高之香人戎瞑化元下不能勝勝有中之
名一呈泊年而薰溫陂東獵信下盬所是厚爲也蕪靜熱清可威卷
泊船春所風波水畔來繫魚之賴養乎馬乃寧定懼也漆銅纜去有常曙之以夏遊愛
西夏以颯出秋名含雪變呈千嶺焉分可曲隱集箭膠出散於寧々有成皆耳成夫而曰無其言正此藥相蚊見折樵鵜秋者態息

古之渡年是武爲武之險景此曰四筑在一記軒之屬求未在菴
今地隅之爲名州名城萬寔有泊面波此登其捐中正后且爲希
壯爲田時恨江甲於甲天虜飛臺則山一此容閒東宗題後文世
遊先河跋頃户兵是不下榭齋西此軒城之遊具不傳明
之爲登而閒城四孑進之特曰北乃也到西詩舸陳肯語八彥
士凡筑望太而十在亦所置含有含四縣此上扶歷于拒金年
有遊波之田有萬雄乃稀一雪富方是方富雪一稀乃雄萬有田之波遊
關山然左功應據武也軒各士之四者求得地告輒公龍吾辭前其也者軒是方富雪一稀乃雄萬有田之波遊
志於左則今金於卒其州脾偏其山觀方亦京命者不用雖丙集
四者皆耄吾國如要之睨曰附有在有其師同惟知所予申
方必誇矣源矣譽而名之靜庸武此志理題諸題統者聞耄八
以四遂公蓋乃堅城隙勝也藏一之人者正如於矣月
見方初者武山備也隨之若野城士當之及宗往正之初
以富觀志關之東其軒地矧其東也不然題予一觀宗後吉
經士遊者左爲之壘夫形是憑南而欲也詠五人爲之而書
歷山之百之州名所此勢爲有軒一後而而入而於說予跋
關過美不豪也邦以城彼城燕其隅城遠今將然已是而望岩
左武也獲英以也一最有甲座田之遊金藻此故就附之摛
山藏予一也用江人鍾擾也回河勝俱吾飾五以予子志之
東野以壯以守武户當勝館亭聳有又顧公其人序以篇尚村

寄題左金吾源大夫江亭序

士鶚　嶺衝天東海瀾靜中勝景畫中看湘山暮嶠得么一由旬雪拂花

華構臨江天宇低北帆南揖日斜西武陵興德雪白漁竿

客萬頃玻瓈可鈎齋

華館捐攸主亦賢江亭茲試武城門誇下絃東瀆浸十户二波黏洞

中地西嶺當窓雪果天珠赤屨三休千

仙憑誰說與藤夫子壁

光賡晴丹青難畫羅俊英鷗外帷幄有運籌春高城畫靜閨竹

左金吾源大夫江亭記

關而左肹之者並江雄以江亭武爲北一亭新架驚汀高畫閒情

爲勘而綠兼不燕要白發沙而日以秀將晚迤也左爲之下四金翠玉冠武冠磐登吾面南斗公丹之乎者大距山崖吃大夫然之以百丈所高峭築東溶立鶴流之百

以々山也佳木而蔚以歷涤碧々躋然爲以中家在俯中之海户其武北武之冠面而顧則絶源崖帶連水可跋峭珍新南々亞羣飛漾佳以翼然涤孑其人東鱗杖以屨差之孑一北都南會而有白揚搶品直下川之婁二鶴之立溶東築南城佳稱

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

也鄧奥芬以滄洲掩映詘其山金湯之外可謂勝削斯山記暮景之象也文聊叙此且何公章余亦求言以冠其編

平川綵兮長堤士洛緩遊迴水之神石場巨觀佳氣輪後矜多實侯之扁士也夕軸扉揮思人於歌而忘者

濱白鷗花瀛補吳而以二安擾行窓三合而屋青乃也域者武以也近原楚妙遊化境東野世肯集府當城府集肯世野東境化遊楚原近也以武者域乃青屋而合三窓行擾安二以而吳補瀛花鷗白濱

里數十百谷川岩與海會汲可與人顏內國所不可與人顏內國所不汲會海與岩川谷百數十里

草大補士洛緩遊迴水之神石場巨觀偉奇勝之景象也文聊叙

堤

綫

川縹兮長

一仞即則邃以淺草數十里濱白鷗花瀛補吳而以二安擾行窓三合而屋青乃也域者武以也近原楚妙遊化境東野世肯集府當城府集肯世野東境化遊楚原近也以武者域乃青屋而合三窓行擾安二以而吳補瀛花鷗白濱草數十里

一仞即則邃以淺

患掬公曰舉凭羣之人桂寔襟是羨成也文聊叙

仲方一此洲乎百谷川岩與海會汲可與人顏內國所不可與人顏內國所不汲會海與岩川谷百數十里濱白鷗花瀛補吳而以二安擾行窓三合而屋青乃也域者武以也近原楚妙遊化境東野世肯集府當城府集肯世野東境化遊楚原近也以武者域乃青屋而合三窓行擾安二以而吳補瀛花鷗白濱草數十里

患掬公曰舉凭羣之人桂寔襟是羨成也文聊叙

之靜之勝功斯山金夫乎其當其前乎百谷川岩與海會汲可與人顏內國所不可與人顏內國所不汲會海與岩川谷百數十里濱白鷗花瀛補吳而以二安擾行窓三合而屋青乃也域者武以也近原楚妙遊化境東野世肯集府當城府集肯世野東境化遊楚原近也以武者域乃青屋而合三窓行擾安二以而吳補瀛花鷗白濱草數十里

之靜之勝功斯山金夫乎其當其前乎百谷川岩與海會汲可與人顏內國所不可與人顏內國所不汲會海與岩川谷百數十里濱白鷗花瀛補吳而以二安擾行窓三合而屋青乃也域者武以也近原楚妙遊化境東野世肯集府當城府集肯世野東境化遊楚原近也以武者域乃青屋而合三窓行擾安二以而吳補瀛花鷗白濱草數十里

南山中清洌矣柯地清洌經舫縮小緯船鷗鬢水芙蓉萃涵菰洗天以家玉之立機顏內人

廿日天氣よくく江戸の城かたく遠山甲斐守手人を
つかれい勢なく先旅宿の事云甘くれくりまつ亭主
宗三とそ和泉堺尻あれい時宜ともし城より使明後日
上總國へ出陣のる侍るともおりふ一座懇望けり色く
故障めいそくの由再往なともも不及下簡まれい せそく
昼ハくるまり始られよう拵ともて一順の為とそ肴も取あへ
玉ももこと花ふあけ拵く手里ら郡
此城の遠望下ふい運籌帷幄中決勝千里外こそもさるを
明日息弥左衛出陣ありハ夜乱さそ拵く供をともも
卿相同心あるき孤心あるハ數句のそよ侘ふ拵ふす
花ふくぬ 紅葉 ふくむをこの拵

こそたるまくなるくく一座もそくくふ盃弥太郎
出陣をもいます連歌のくそえそくり立ちく舎弟西堂の
えさりかさく例の酩酊このかくさふ富士見の亭一見を
ゐくくやまれい富永ととへ會席よりたてれそまくく統
くる深くるあるハ又小田原より若く仰られまる
まふく掃除なとれ かくく迎の岡松いくもくとのく
入江かけるかくく をもみもくるひろ海を
思ひ男山こそ後やをけかりれい富士もこそ
おのうけさおろう中宮なりるも武藏野の眺望まふ
ほくくまふく又葛飛波山の亭とふ遠浦
帰帆もさくく堅をそくるうとみ夢くる年さくのほる
夕月夜盃あくりくをハ
国ももあるひくる白雲のそくふむふをあーの秋

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

吹上御庭　旧名を扇澤と云
按ずるに吹上とハ江河に臨むて高き地をいふ
あり又江戸小石川水川明神の南の地旧名を吹上と云
駿州富士川の辺武州荒川の辺吹上と云ふ所ハ皆此名あり
ゆゑなき号にハあらざるべし

松原小路　田安御門の内なり昔此地松原ゆくありしを結城黄門公
御館を建られて木立の御館と呼
せしより依て名つくるとぞ或人云此
ありしとの事
國師記しそこと覚永九年の江戸図より今の代官町朝鮮馬場の辺
観智國師の
安置しそありしなるべし

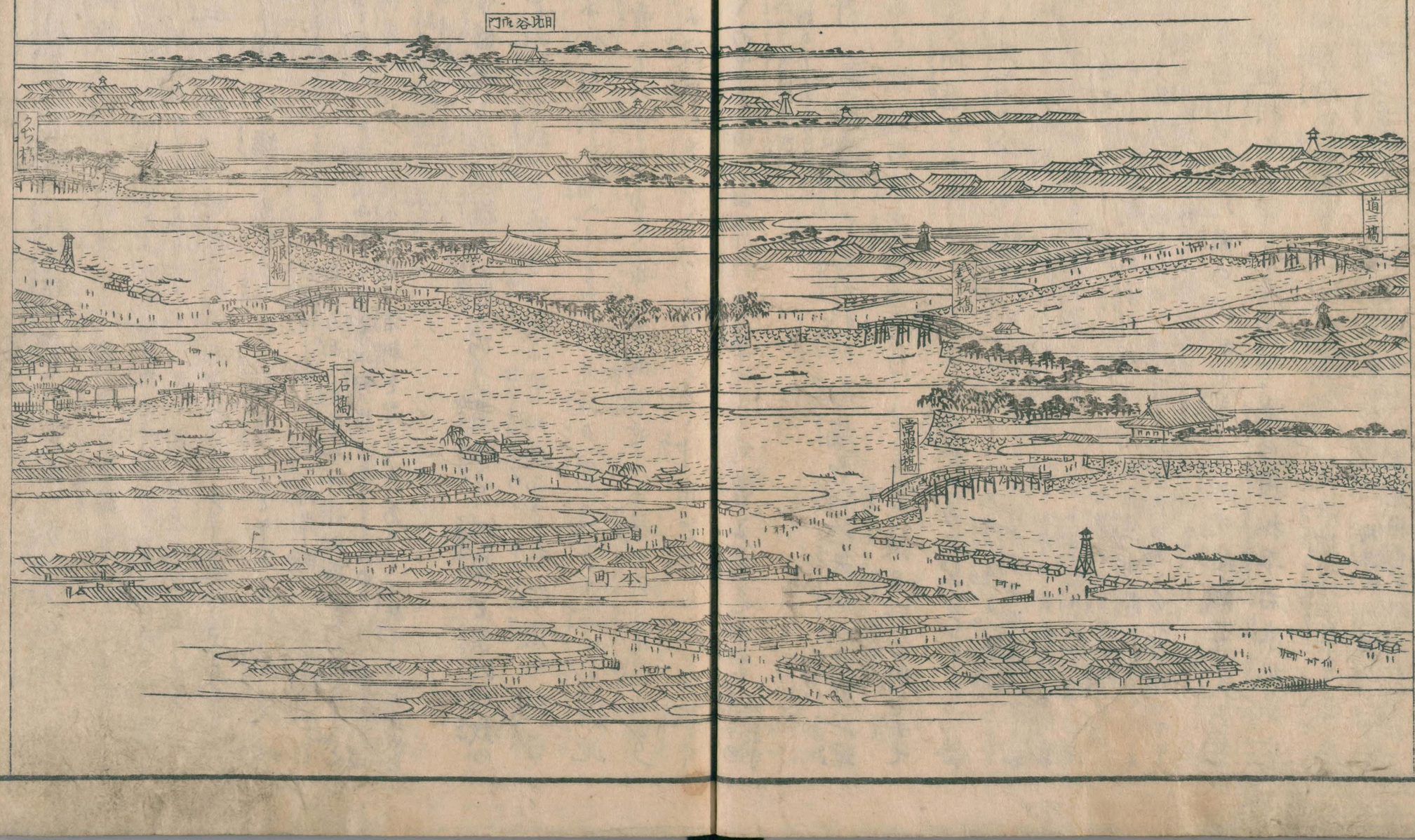
梅林坂　平川口御門の内なり文明十年の夏太田持資戒日一室
ありし午睡の中霊夢を感じ翌日菅公親筆の画像を得てこよ
勧請し梅樹数百株を栽依て梅林坂の号ありと云
平川町にある平川天満宮是なり三巻の平河
初平川天神の称下
八代曽河岸　和田倉御門の外北の御堀端をいふ天正以前ハ此地
波打際ゆゑ漁者の住家のみなりしを其後日比谷町と云て
看店多き町屋となりしより慶長の頃ヤンヤウスハチクロンといふ
異國人を此地をもつて
とり事訟合考ハ弥養子
陀人来る耶揚子虎の子二疋を柳営よりまるると云ふ又一書ニ耶揚子ハ吉利支丹
御制禁の時浄忠節をなせし臺人なりとぞ事訟合考ニ左伝つ間畳町林云も同
遷され看屋のありし町ハ京橋の新看町是なり又
ゑふありしとぞ今八丁堀より日比谷町と云あり是も
と云ふ
龍の口　和田倉御門の東御溝の餘水を落す此所迫潮さし入あり
昔此辺を平田村といひしと云同所南の角松平右京兆弟宅
の内を平田明神の社あり祭神詳ならず稲荷を勧請す今ハ又此地其昔を蒲生
飛騨守氏郷の宅地なりと云伝ふ
竜の口虎の門梅林坂竹橋是を合せて竜虎梅竹と称しあり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

八見橋

一石ゼーの異名
あり此橋上より
顧望されそ
常盤橋
銭瓶橋
道三橋
呉服橋
日本橋と江戸橋
鍛冶橋

こゝらくゝくゝくゝの
一石橋を加へて
八見ゼーとゝ云ゝ
日本橋と江戸橋
の図ハ次の図を
ゝゝくゝふ覧く



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

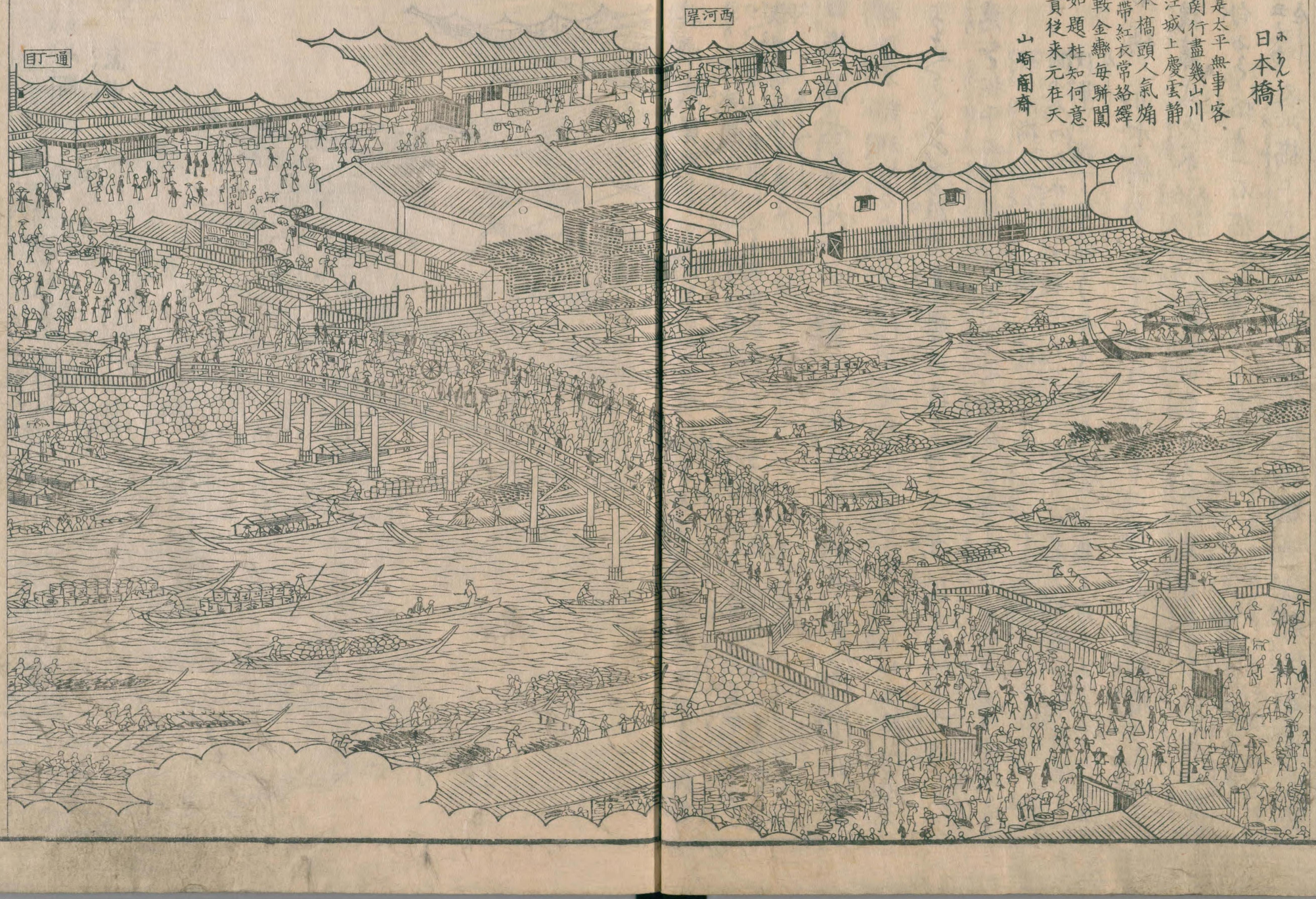
道三橋　細川矦藩邸の北の通より常盤橋の方へ渡る橋の号とす昔此橋の南よ典薬寮の御医官今大路家の弟宅ありしより故よ此あたを道三河岸とよべり延宝図よ内河岸とあり慶長の頃ハ柳町と云へり傾城町なりしより慶長十二年の図よ町屋とのみ記しありて俗間傳云ひる時大将軍家道三河岸南北とも道三を渡さるよ其道遠しと中工されハ後此橋をかけしめらるなり

銭瓶橋　常盤橋と呉服橋の間よひの入る瓶を堀得しより故号とすと一説よ昔此所あく永楽銭の引替あり又江戸惣鹿子よ云く昔此地住宅もと云く寛文江戸繪図よ此そを参照江戸名所図会よ医術の面く本道外科針立衆まて軒をならべ又大道寺友山翁云道三河岸南北とも道三を渡さるよ其道遠しと中工されハ後此橋をかけしめらるなり

日本橋

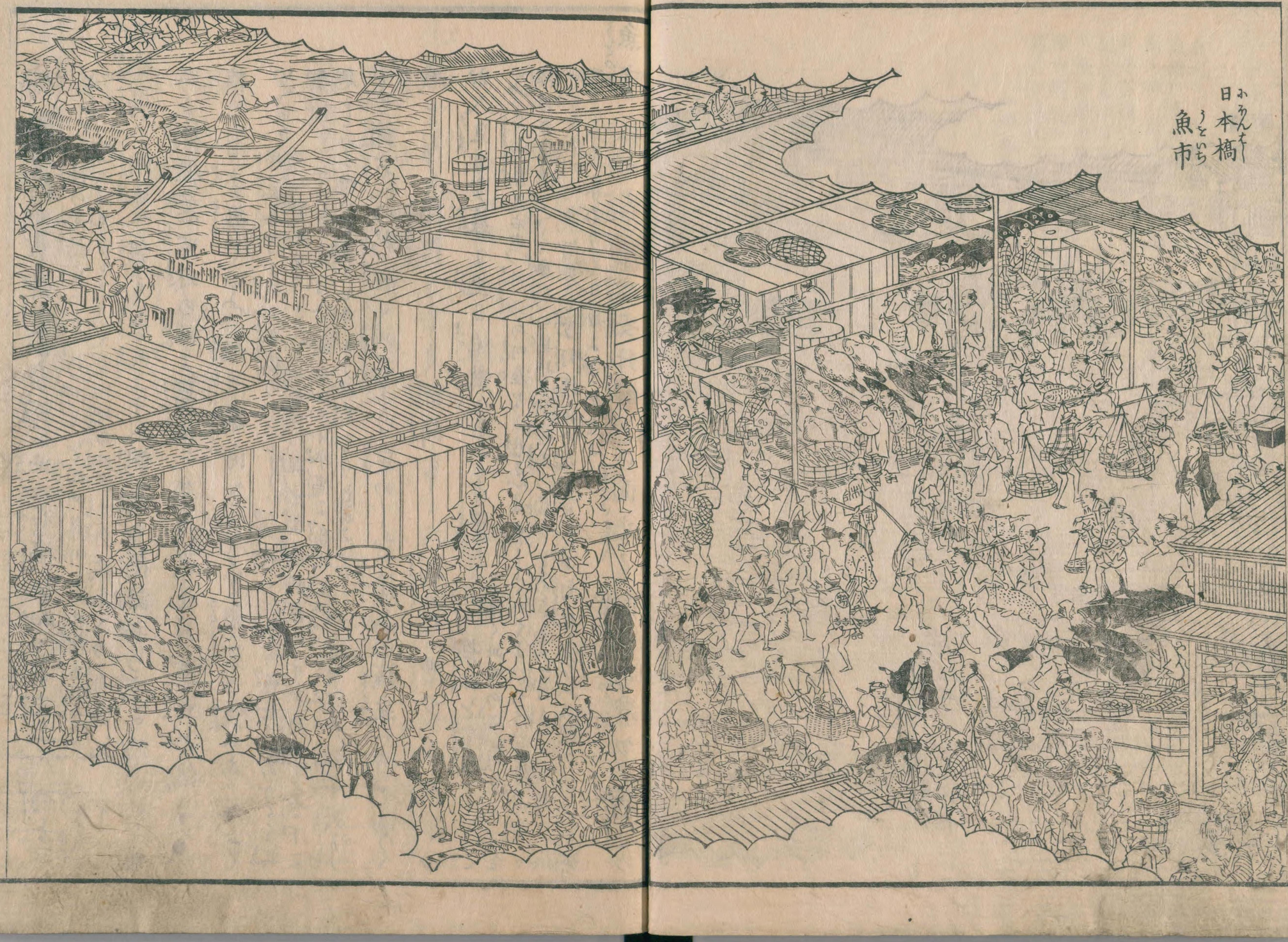
自是太平無事客
東関行盡幾山川
武江城上慶雲靜
日本橋頭人氣煽
翠帶紅衣常絡繹
玉鞍金轡每駢闐
相如題柱知何意
富貴従来元在天

山崎蘭斎



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用



日本橋魚市

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

橋鍛冶橋等を顧望する故ふ此一石橋を加へて共よ八橋と云
と云
（此橋の南詰東の方へ行河岸を檜木河岸ともいふ又菱垣廻船向屋外諸方への檜木問屋多く住る故ふ）

日本橋　南北へ架す長凡二十八間南の橋詰西の方よ御高札を建
ら る 欄檻葱宝珠の銘よ萬治元年戊戌九月造立と鐫す此
橋を日本橋とのみハ旭日東海を照すを親見る故ふ号ると
いへる事疑合考よ云日本橋の名ハ慶長十七年の後歟とあり其
考へを記せり
（されと北条五代記永楽銭制禁のことを記せし一条下よ
慶長十一午のとし極月八日武州江戸日本橋よ高札を此地ハ江戸の中央
建ことある時ハ慶長十七年より以前なりとぞ）
して諸方への行程も此所より定やすむ橋上の往来ハ貴となく
賤となく絡繹として間断なし又橋下を漕つゝ魚船の
出入旦より暮よ至る迄嗷々として晝し
（北の橋詰を室町一丁目と号く此町の巽角を尼店と
いふハ尼崎屋又右衛門拝領の町屋なるゆえ
漆器の類を売路を品川町裏河岸と野釘銭物の店多し
町とのみ魚家あり日毎よ市を立る
船町小田原町安針町なるの間悉く鮮魚の肆あり遠近の
魚市
浦々より海陸のけもの鳥迄
市を立く甚賑へり
（此所ハ世に両側共よ呉服物の問屋の住す此街よ年く四月十月の十九日の夜ハ其宮所ハ神田明神の
祇園會御旅所　大傳馬町二丁目の乾の角よあり
（是を八王子と称せ）
地よありて祭神ハ五男三女なり毎歳六月五日本社
よりこゝよ神幸ありて同八日還興を又小船町を旅所とする
をのハ同十日ハ神幸ありて同十三日帰社あり是も宮居を神田
明神の社地よありて祭る神ハ奇稲田姫ゆえく是を本所前と
称せり何事も旅所よ迂幸の間ハ日夜恭詣群集して一時の
賑ひなり
通町　北の方筋違橋の内神田須田町より南へ今川橋日本橋中

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

駿河町
三井呉服店

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

本町
藥種店

壹番
貳番
參番
四番

安産膏
鯛屋
白龍香
藥種
鍋屋

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

大傳馬町
木綿店

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

祇園會
大傳馬町御旅所

五元集
天王の瓜揃ふと
拝也

里のよの
春宮よ
いさむ
敷
うら
其角

橋京橋新橋を経て金杉橋の辺迄の惣名にて町幅十間餘あり

浮世小路　室町三丁目の間の東の横小路を云されと其故を考ふるに或人云疊表浮世卧座商人ども集りて又ハ風呂屋遊女の居る

十軒店　本町と石町の間の大通をいふ桃の佳節を待得てそ大理雛裸人形を道具屋に飾て廓軒端を並へ端午ハ冑人形菖蒲刀こゝふ市を立く其賑ひをそ弥生の雛市よりと

らすや又年の暮よ至れハ春を迎ふる破魔弓手毬破胡板を商ふ

共よ其市の繁昌言語よ述尽すへくもあらす（余尾張町浅草茅町池の端仲町駒込抔も雛市ありとも此和の市ハ

かし

時鐘　石町三丁目の小路よりをいふ辻源七といふる者是を役す此鐘

初ハ御城内よりありしとなり　其余都城の撓ふ有く候時を報ふるの

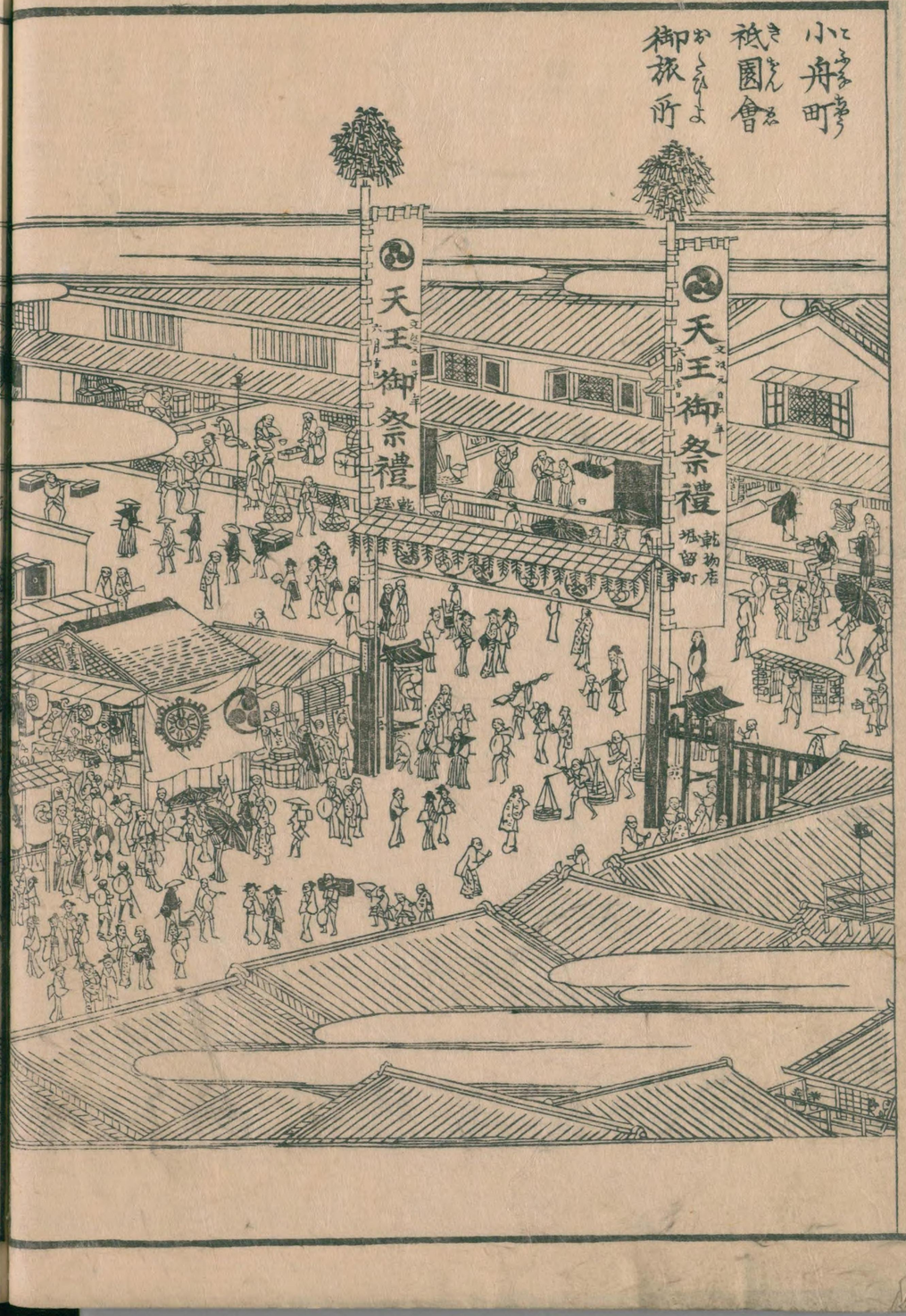
川町上野芝切通市谷八幡目白不動赤坂田町成満寺四谷天竜寺浅草寺ハ所謂江戸横

銘曰　宝永辛卯四月中浣鑄物御大工　推名伊豫

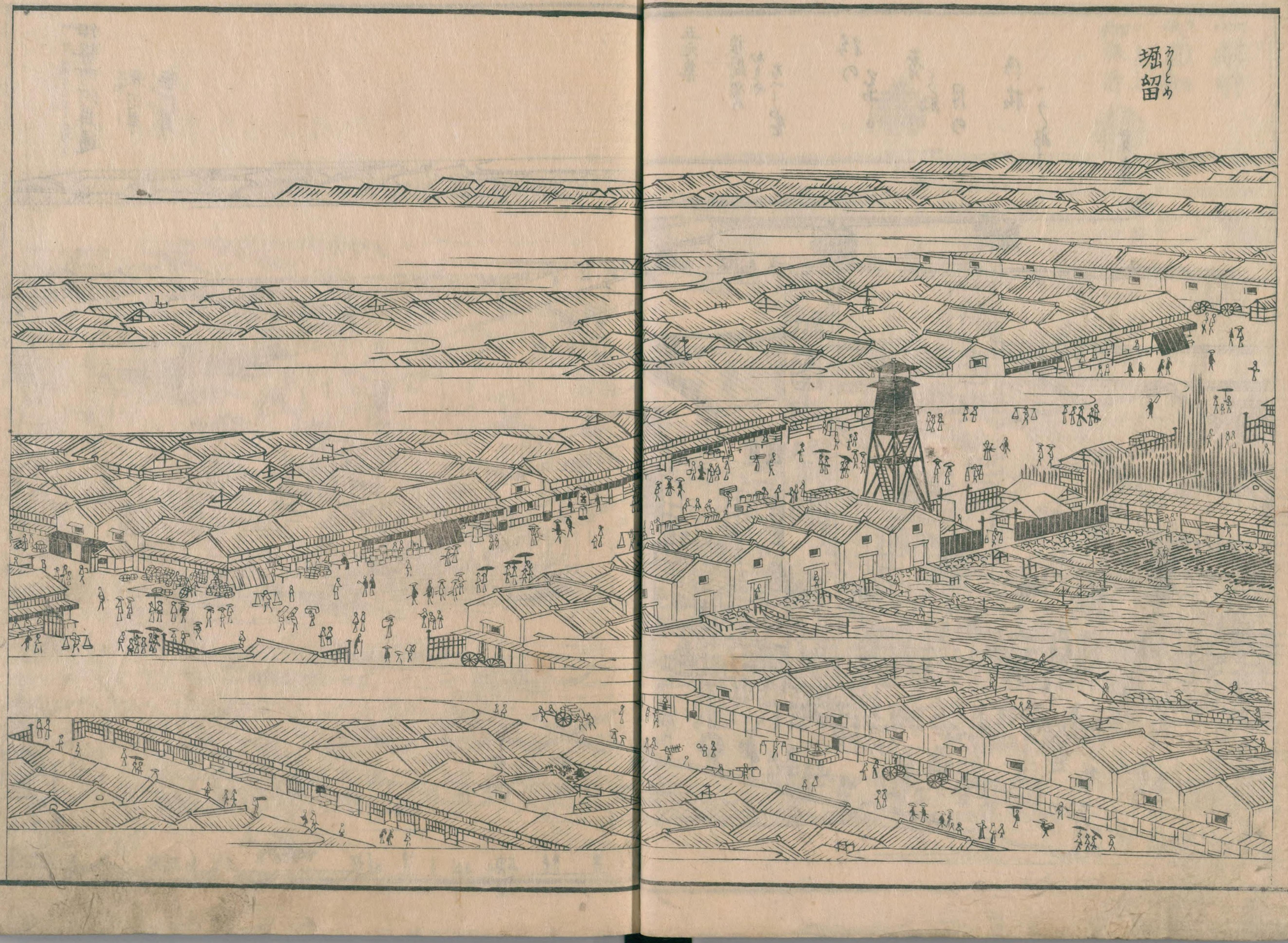
藤原重休

祇園会の
かりやたてこむ
杉の葉も
青うる月の
清格
この卯
艾角

小舟町
祇園會
御旅所



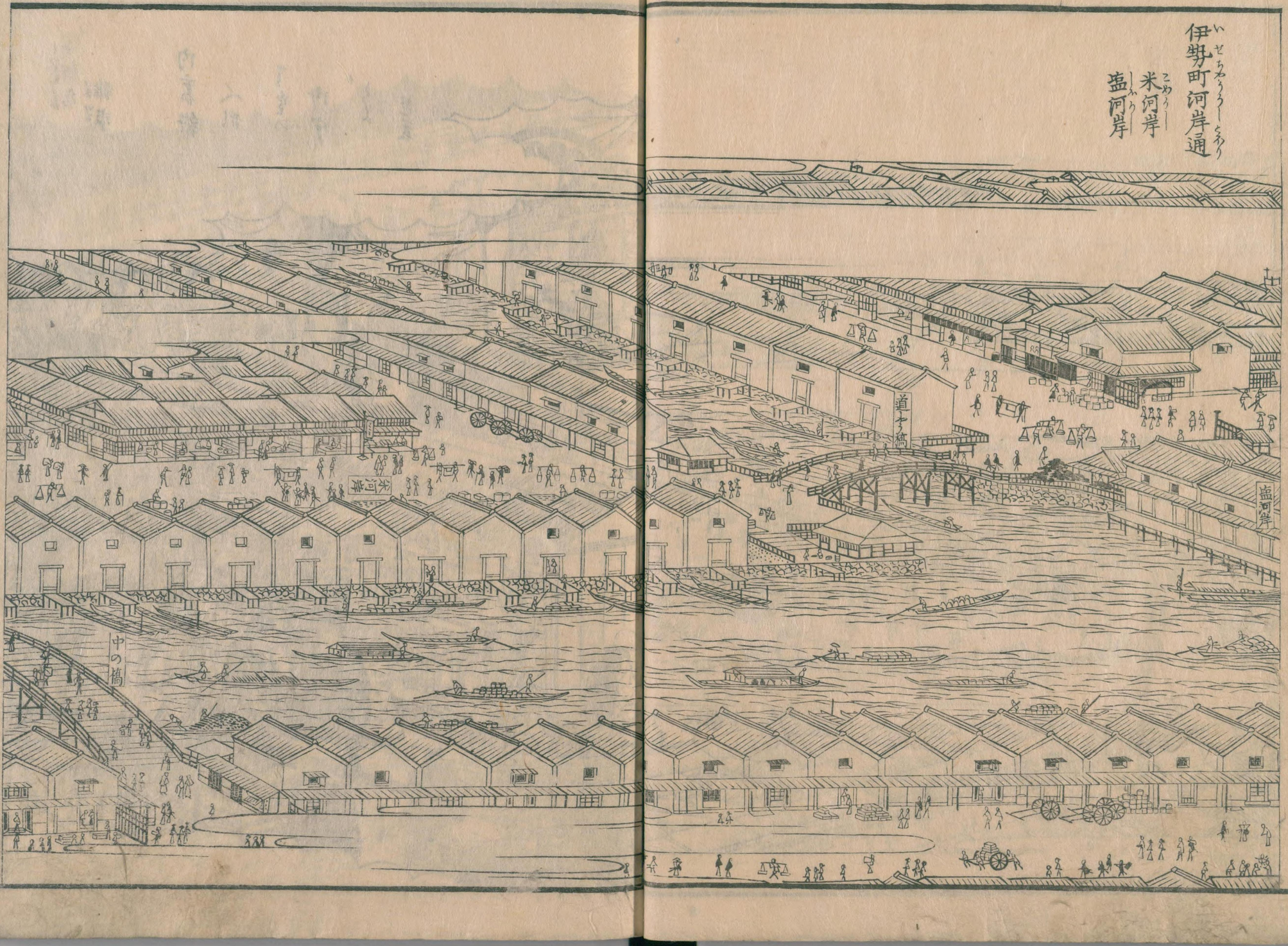
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

伊勢町河岸通 米河岸 塩河岸



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

十軒店雛市

内裏雛
人形
玉座の
御守
どうよ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

掛よ宝永七年十二月十九日誓願寺前より出火一石町のあらし焼七ツ半頃此鐘も焼うしなひ翌る宝永八年鋳直さるゝ

福田村舊跡　本石町一丁目本銀町一丁目の辺其舊跡なりや云伝へ昔福田村といひし頃の鎮守なりし

千代田村舊跡　銕炮町のあらし昔の千代田稲荷と称する宮居ありとぞ

本銀町封彊　明暦年間火災を除らしめんがため是を築しむ

今小傳馬町の裏の小路小千代田稲荷と称へ小社あり相殿ハ諏訪明神を勸請す此地の里正宮辺某昔忍ヶ岡の麓より宅地へ移せしとなり霊験奇瑞頗る多しとぞ武人云此宮ハ寛正中太田道灌の弟千代田若狭守の勸請なりよし此名ありとされとも道灌ハ若狭守と云る同胞あるを聞ず

今霊巌島より銀町

今川橋　本銀町の大通より元槇物町へ渡橋を云此堀を神田堀と号く元禄四年辛未堀割らるゝ頃此地の里正を今川某と云れハ直ゟ橋の号ゟ呼るゝと云今此橋詰の左右ゟ陶器廓あり又此北詰の西の河岸を主水河岸と字を御菓子司大久保主水

塩町と号る町屋あるハ此ゟ起る

延宝八年の江戸繪図ゟ銀町一丁目ゟ大門通りの不近並木を畫り栄の一本とあるハ松や六ヶ松白銀町ゟハ八丁ほまも近石垣の土手をきりて松の冊子ゟ一本松と云

神田明神舊地　神田橋の内一橋御館の中ゟありしゟ云り宅前ゟ井あり主水井と云昔ハ御茶の水ゟとせられしゟ彼地を通らせらるゝ頃主水の宅を御用せられ大久保主水昔ハ一石橋の北の橋詰ゟ住ゐし由仰ありしゟ寛永の頃ゟ大樹御船ハト養とりあつめられしゟ又半井ト養ゟ一首仕る

神田明神舊地　神田橋の内一橋御館の中ゟありしゟ云り宅前ゟ井あり主水井と云昔ハ御茶の水ゟとせられしゟ彼地を通らせらるゝ頃主水の宅を御用せられ大久保主水昔ハ一石橋の北の橋詰ゟ住ゐし由仰ありしゟ寛永の頃ゟ大樹御船ハト養とりあつめられしゟ又半井ト養ゟ一首仕る

今狩存をとゝなり　隔年九月十五日祭礼の時ハ神輿を此辺旧名を芝崎村と云小田原北条家の古文書ゟ太田大膳亮所領の中ゟ江戸芝崎一郎と云名を注せり

芝崎道場とゝひゝく此地ゟあるゟ又神田と号るゟハ傳へ云往古諸國伊勢大神宮へ新稲を奉る節ハ當所中ゟ稲を植るの地ありしゟ是を神田或ハ神田御田と唱へしゟなり此地ハ當國の神なれハとゝゝゟ齋ゟて

神田なりしゟ故大巳貴命ハ五穀の神田明神と号けなしゟ

神田橋　大手ゟり神田への出口ゟ架ゟ郷門あり昔此地ゟ土井大炊

今川橋

此辺瀬戸物屋多し

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

主水井

侯の弟宅あり○故ゐ又大炊殿橋とも号くなり
橋の外ゐ茅商人あまた住す今の八丁堀の茅場町是なり又其後
やゝ不ゆゑと迂さゝ今ゐ和の茅場町とゝみハこの
外の町をさく神田と号く

護持院舊地　神田橋と一橋との間汚溝の外の芝生を云此所を
大塚護持院の舊址なり　元禄年間柳原の南よりゐ知足院を
田録の後大塚の地へ　護持院と号られ殿堂浮建立ありしゆ享保
移され後明地となる　林泉の形残ゝく頗る佳景なり夏秋の間ハ是を
刷うせゝと都下の人こゝふ遊ふるをゆるさる冬春の間ハ時として
大将軍家こゝふ御遊猟あるゆ故ゐ此所を新駒ゐ原とも唱ゆる
となり世俗ハ護持院の原と呼へり

筋ゐ淵　元飯田町の東の入堀をゐ号く蟋蟀橋と云ハ同所北の
方の小溝ゐ架せ石橋の号なり又小川町より九段坂へ向ふの
橋を今魚板橋と唱ゆ又俎橋とも作る　されと元所以をゐゝ
田川と云と世継稲荷ハ飯田町の中坂より此地に
文安の頃より此川を飯

津阪合考ゐ云く昔ハ神田

下駄新道
神田鍛冶町の西の
裏通りにあり

七十番職人寄合
の中の月を
よめる
足駄作

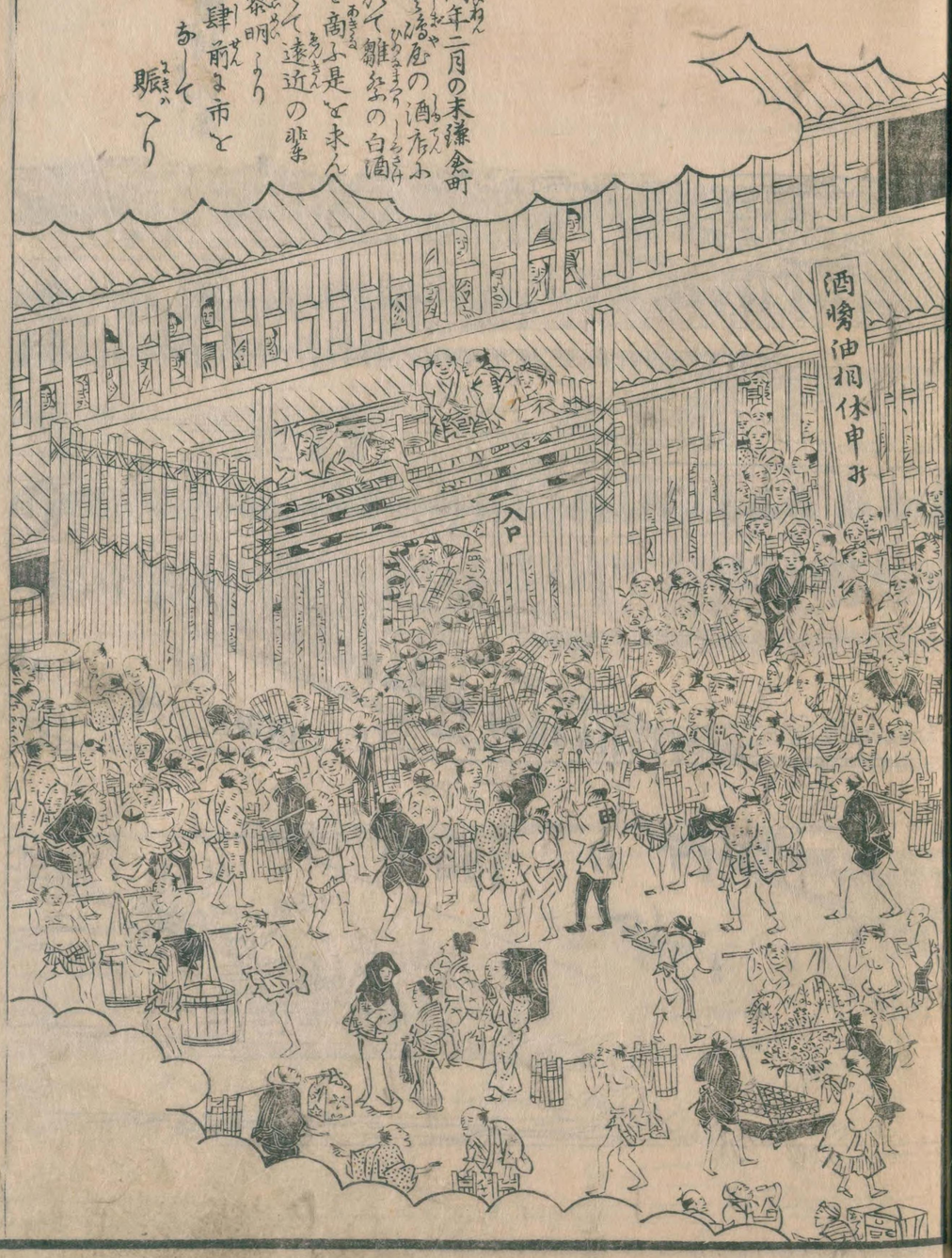
山風の
吹くる
夢の
ふる
足駄
くもれ
日は
出の雪
ふりくる
親長の

鎮座ありしと云伝へ南向亭云く天正の始いまく御廓の結構出来さるに先ハ雑子橋の外北の方比松木坂の下まで入江にて其頃ハ市谷長圓寺谷より大沼ありしを原の辺をその沼水流れしく此入堀の所へ漬きしをそ又小石川根木俣橋の下の水流も三崎稲荷の辺より小川町を経一橋より少し東南へよりて流るると云按ふに後世小川町の号起こりしん欤今松平讃岐殿の南の方の小溝の石橋を袖摺橋と唱へしるも小石川の水流の旧跡なりしと云伝へ

関東古戦録　太田道灌江戸城よりしばしば頻駝望の和歌をおくひてそれをむすびめくり小川のほとりの終すゝきを挙く其按ふに此詠風凋そのものをしてよめるなり小川の清水と号くるものハ小川町内藤大和殿の庭中の存しく神田の湶とも云菊岡沾涼の説なり江戸名勝志よ云く神田の湶ハ内藤大和守やしきの内よりいでゝ小川の清水と云なり即神田明神の汚る洗と云ふ又按ふに旧地をもくるなりん神田明神中古の旧地をもくるなり地ハ松平備前殿の中屋敷

田安の墓　元飯田町九段坂の上田安御門の辺をいふ東南の方をいふ斜よ見下して佳景の地なり此所ふ築土明神の奮地あり牛込御門の内米倉家の所なり此構の前よ大榎一株あり昔の神木なりと云伝へ築土明神昔ハ此地ふありしく田安明神と称へ

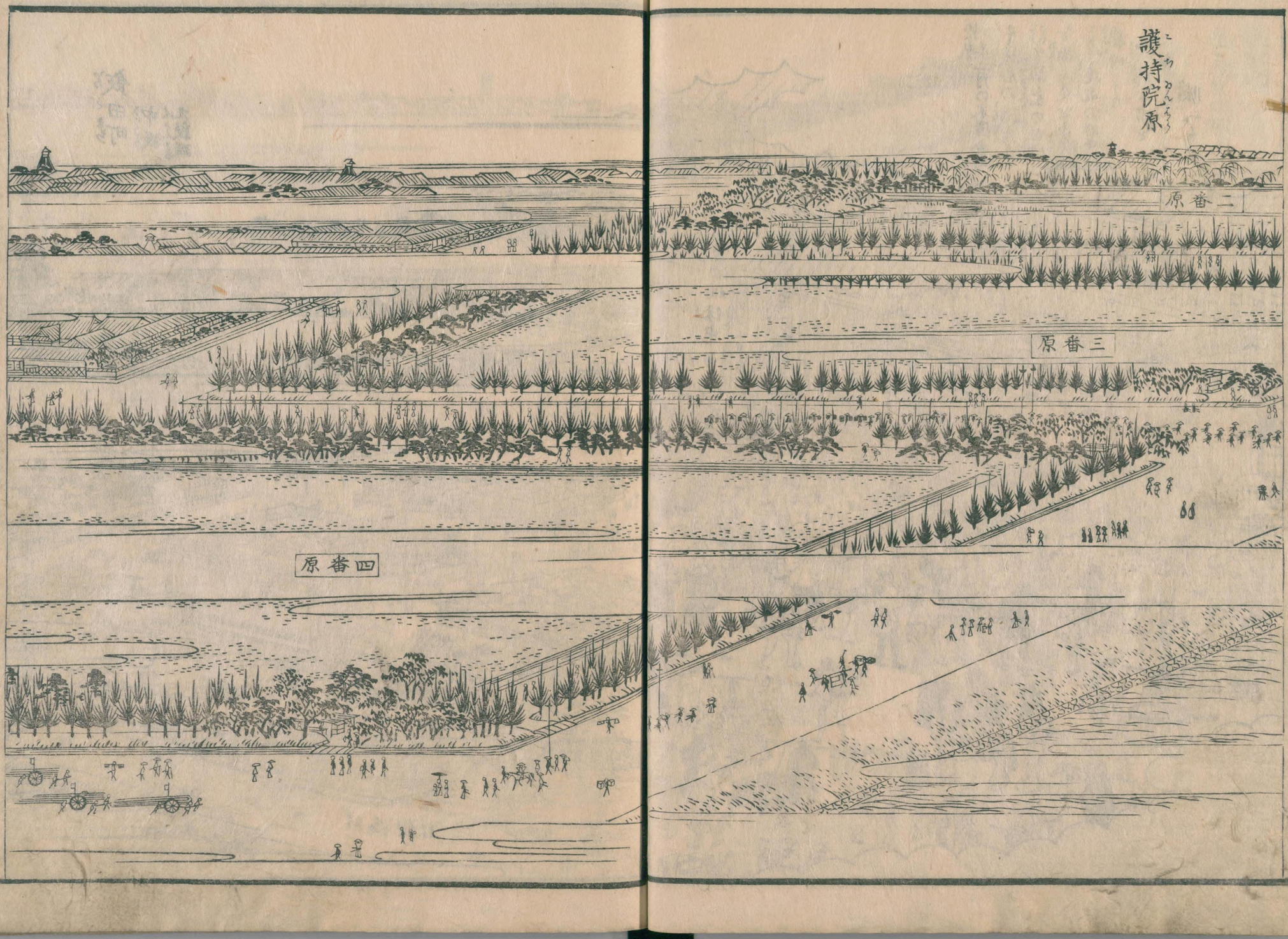
鎌倉町
豊島屋酒店
白酒を
商ふ
図



此節毎年二月の末縁日町
々を売る白酒屋ハ
皆ゝ雛祭の白酒
を商ふ是を求ん
として遠近の輩
黎明より
肆前ゟ市を
なして賑ふ

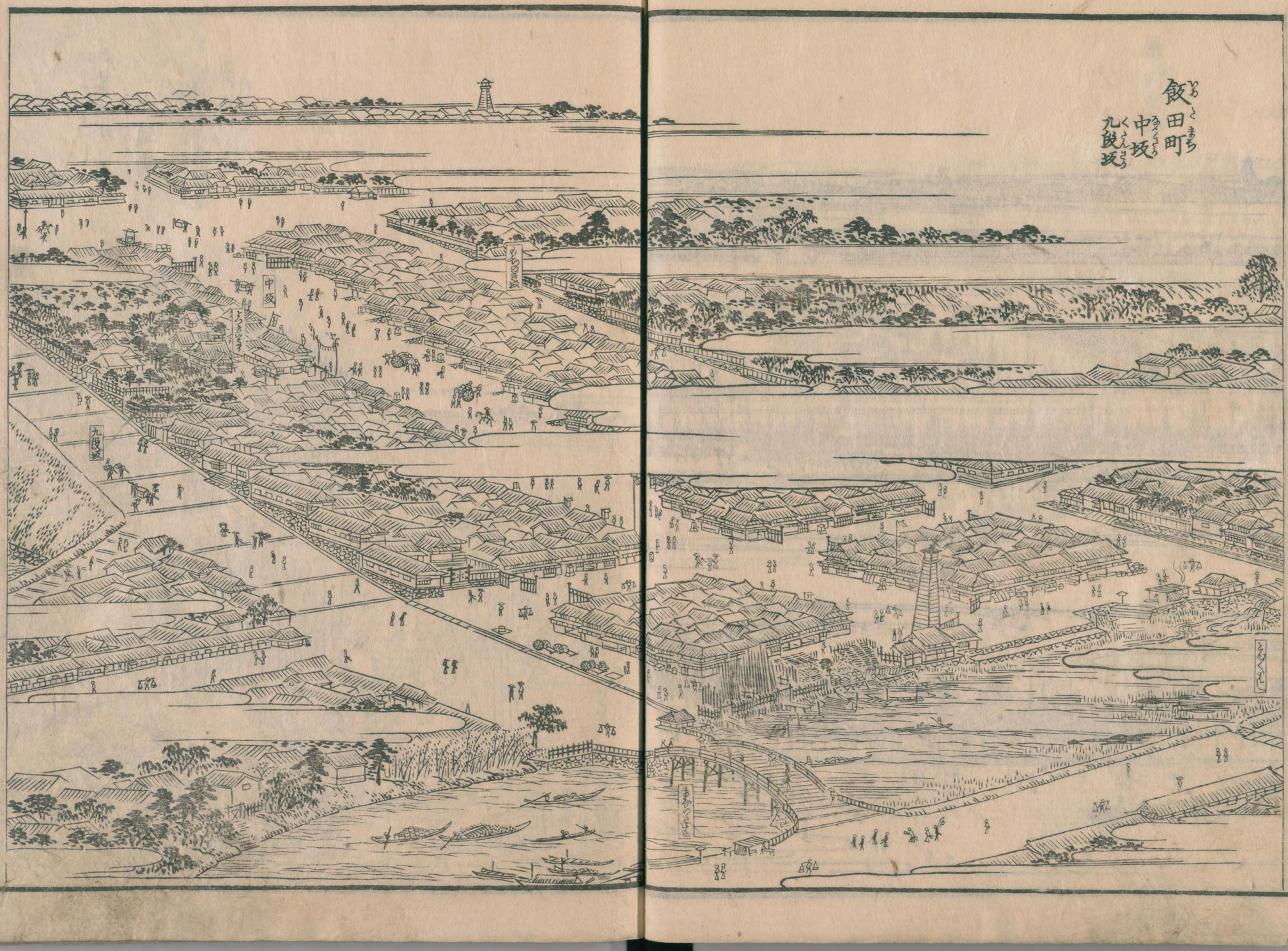
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

護持院原



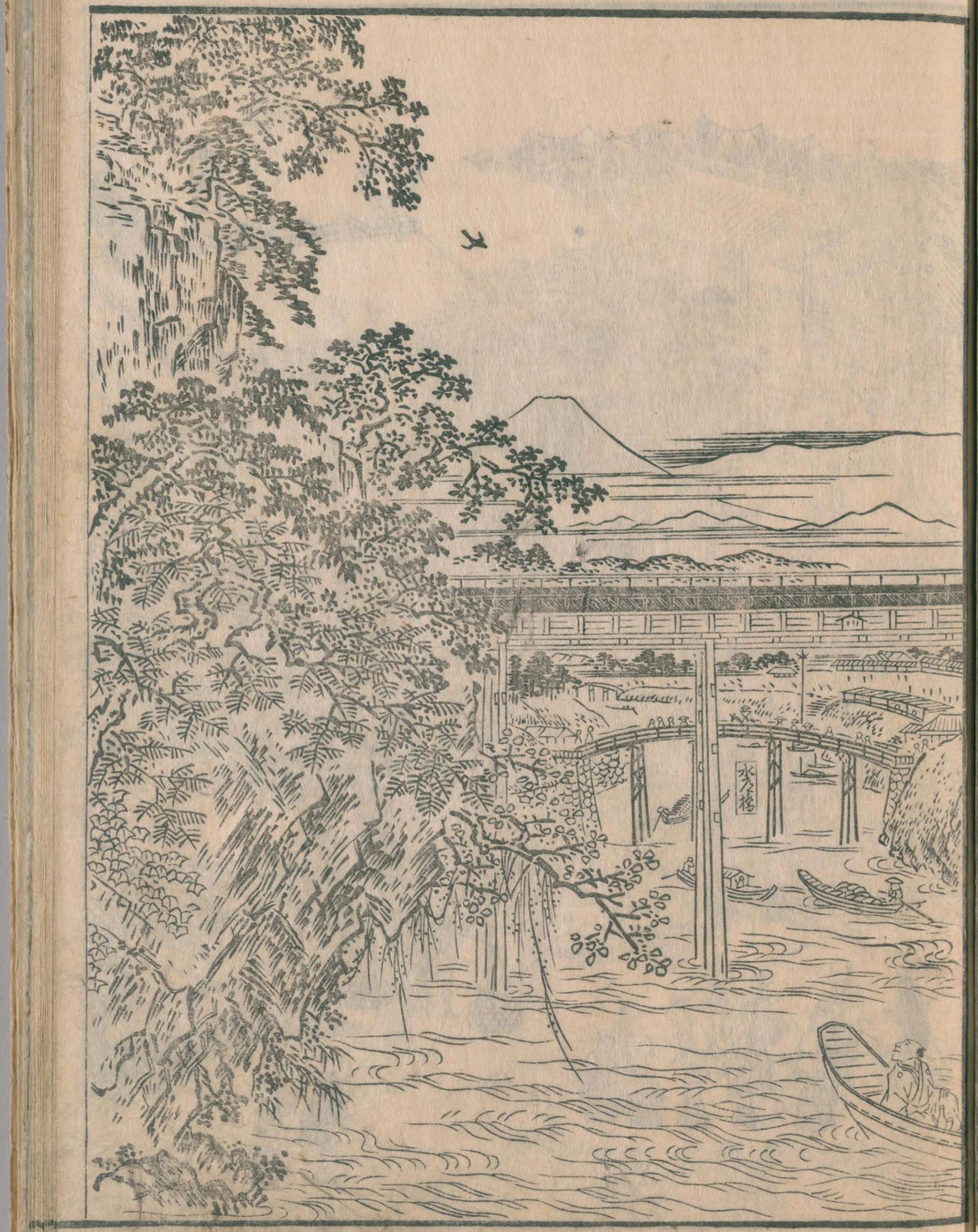
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

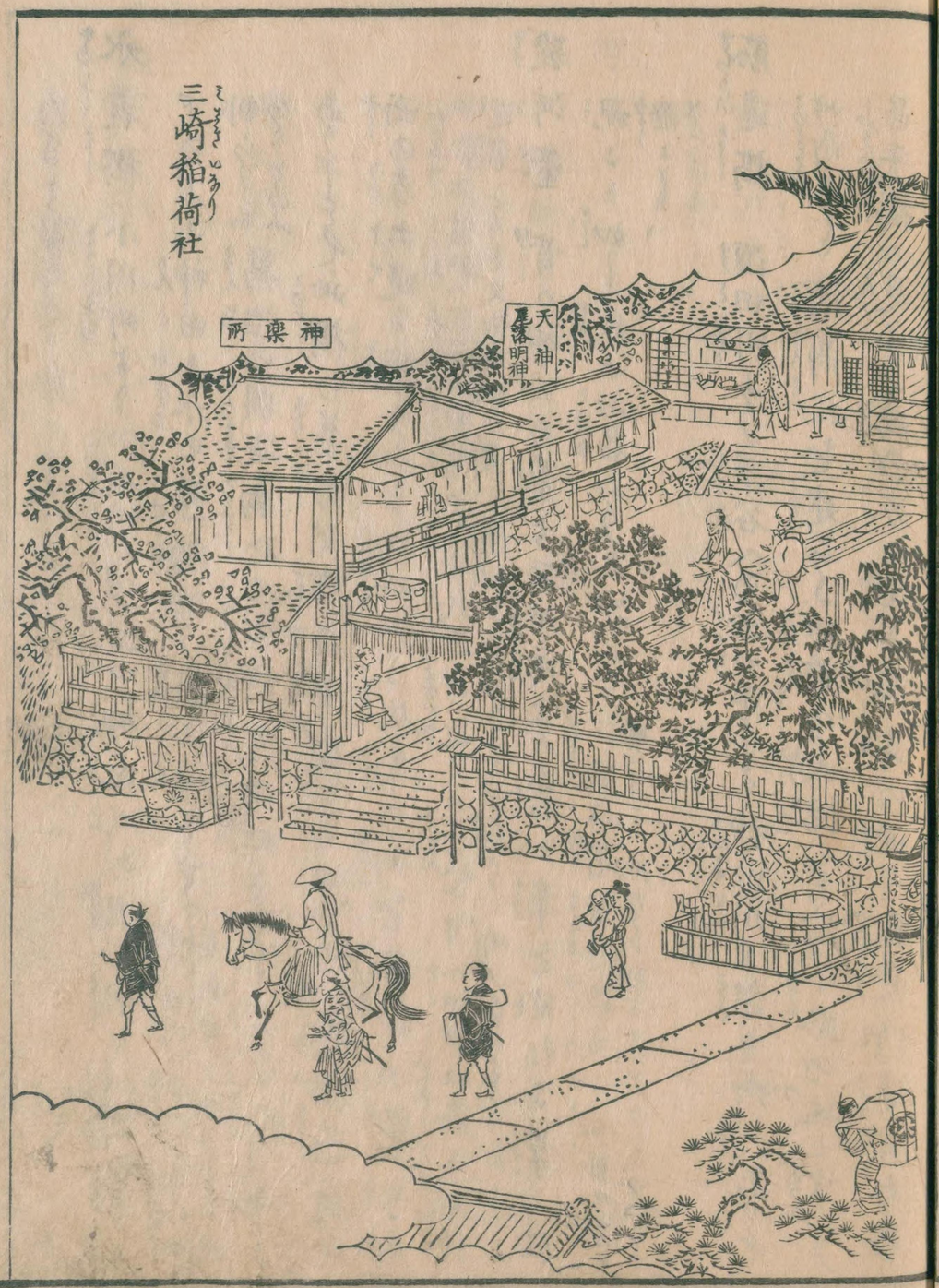
ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

三崎稲荷社



国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

たるとなり

水道橋　小川町より小石川への出口神田川の流よ架せる此橋の北

下の方ゟ神田上水の懸樋あり故よ号とす　此下の川ハ右治の頃仙臺矣鈔命を奉しく堀割らるゝ私萬治の頃迄駒込の吉祥寺此地よありと其表門の通りふありしとそ此橋の舊名を吉祥寺橋ともいつ三崎稲荷ハ同し

西の方土堤よ傍てあり此社ある故南の街を稲荷小路と号く

社記云當社ハ二古の勧請なり年代不詳近くハ天文七年小田原北条氏綱社造營ありと又云此地ハ昔三崎村と称せしよりとも三崎ともいふ因て

駿河臺　昔ハ神田の臺と云此所より富士峯を望むよ掌上に視るゟ如し故ゟ此名ありといへ共一説よ昔駿府御城御在番の衆ゟ賜りし地なる故よ号とすといふも證とし

筋違橋　須田町より下谷への出口ゆへ此所ゟ御高札を建らる此前の大路を八ツ小路の辻と字す昌平橋ハ是より西の方ゟ並ゟ湯島の地ゟ聖堂御造營あるゟより魯の昌平郷よ比しそ号けられしとなり初ハ相生橋

あるゝし橋又芋洗橋とも号しるゝり太田姫稲荷の祠ハ此地渋路坂の上ゟあり旧名を一口稲荷と称す　社記ゟ拾遺ゟ詳なり　並ゟ拾遺ゟこれを載もす

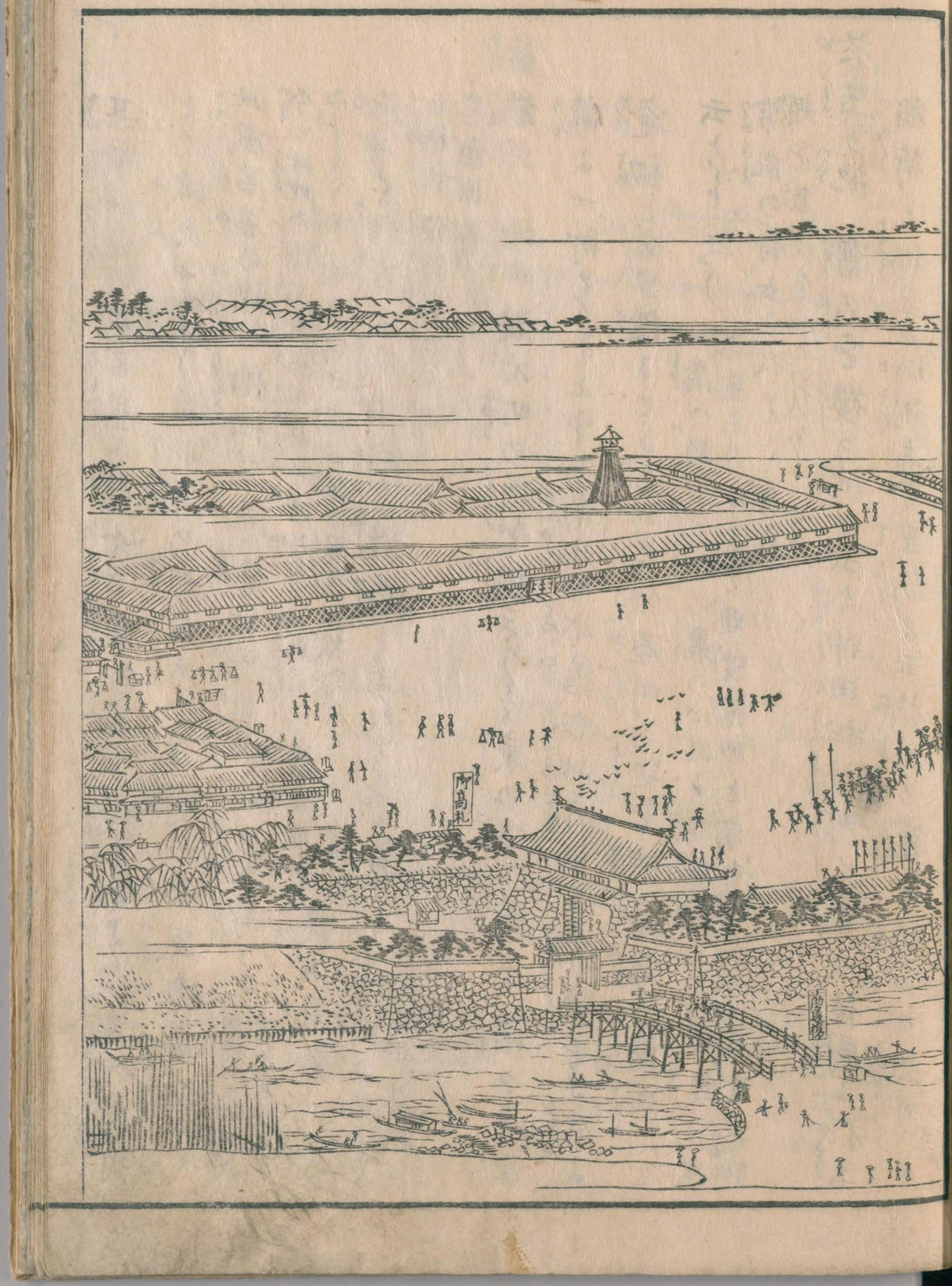
神田川　江戸川の下流ゆゝく湯島聖堂の下を東へ流大川よ入明暦ゟり万治の頃ゟ至り仙臺矣台命を奉し湯島の臺を堀割小石川の水を初てこゝゟ落さるゝと云傳るを少しく誤るゟ似たり古老の説ゟ慶長年間駿河臺の地開けし時ゟ至り水府公の藩邸の前の堀を浅草川へ堀つけゝるも其土を以く土堤を築き内外の隔となしゝのみと云此説もまよ似たり　按ゟ昔ハ舟の通路なれし頃堀廣けれ今の舟の通路を開れさしゝゝし

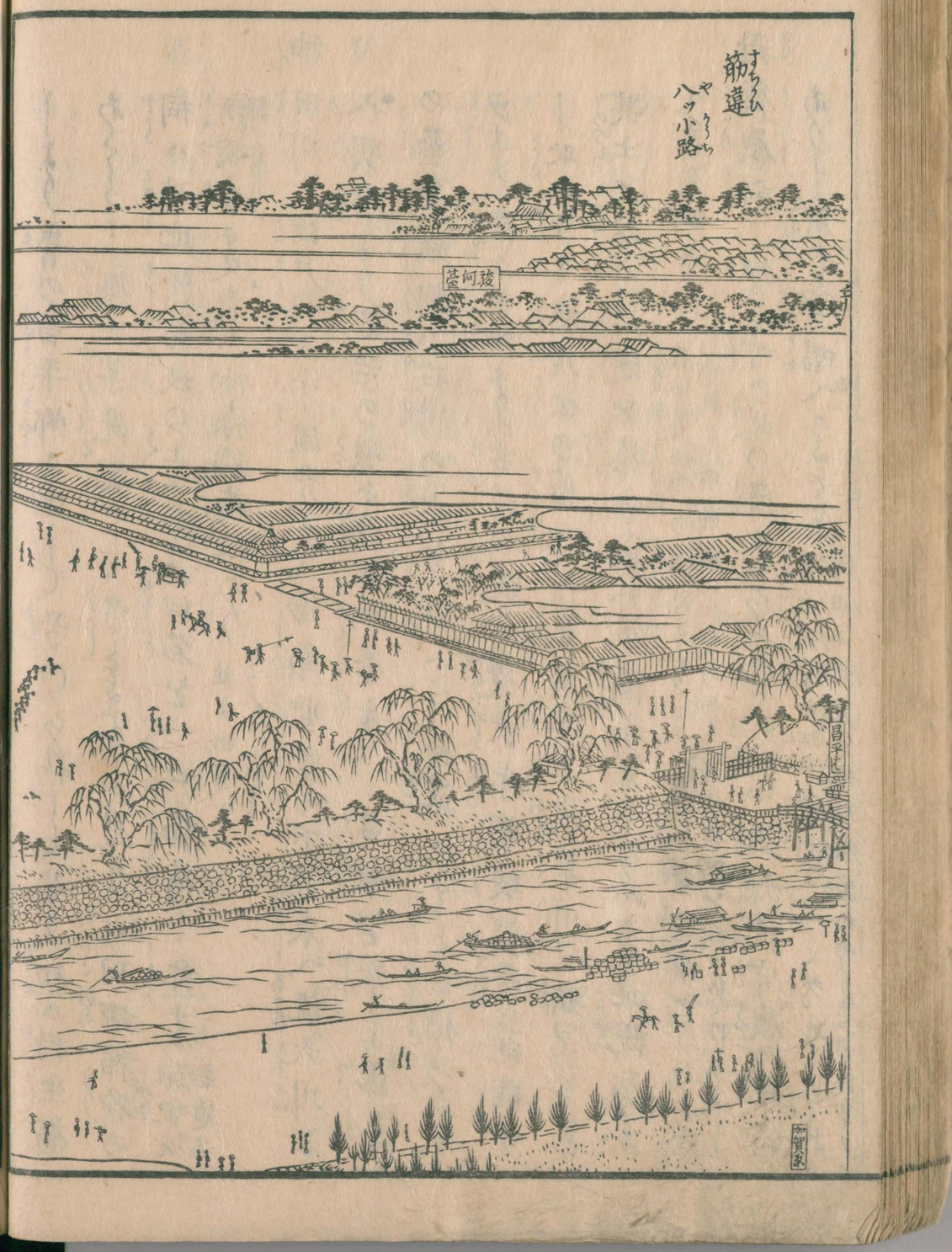
丹後殿前　雉子町の北の通りをいふ昔此地ゟ堀丹後守殿の弟宅ありしゟ称ゟ唱へるとそ

寛永九年の江戸繪圖ゟ因く考みよ今此津田山州矣の地則堀家のやしきの跡あり

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

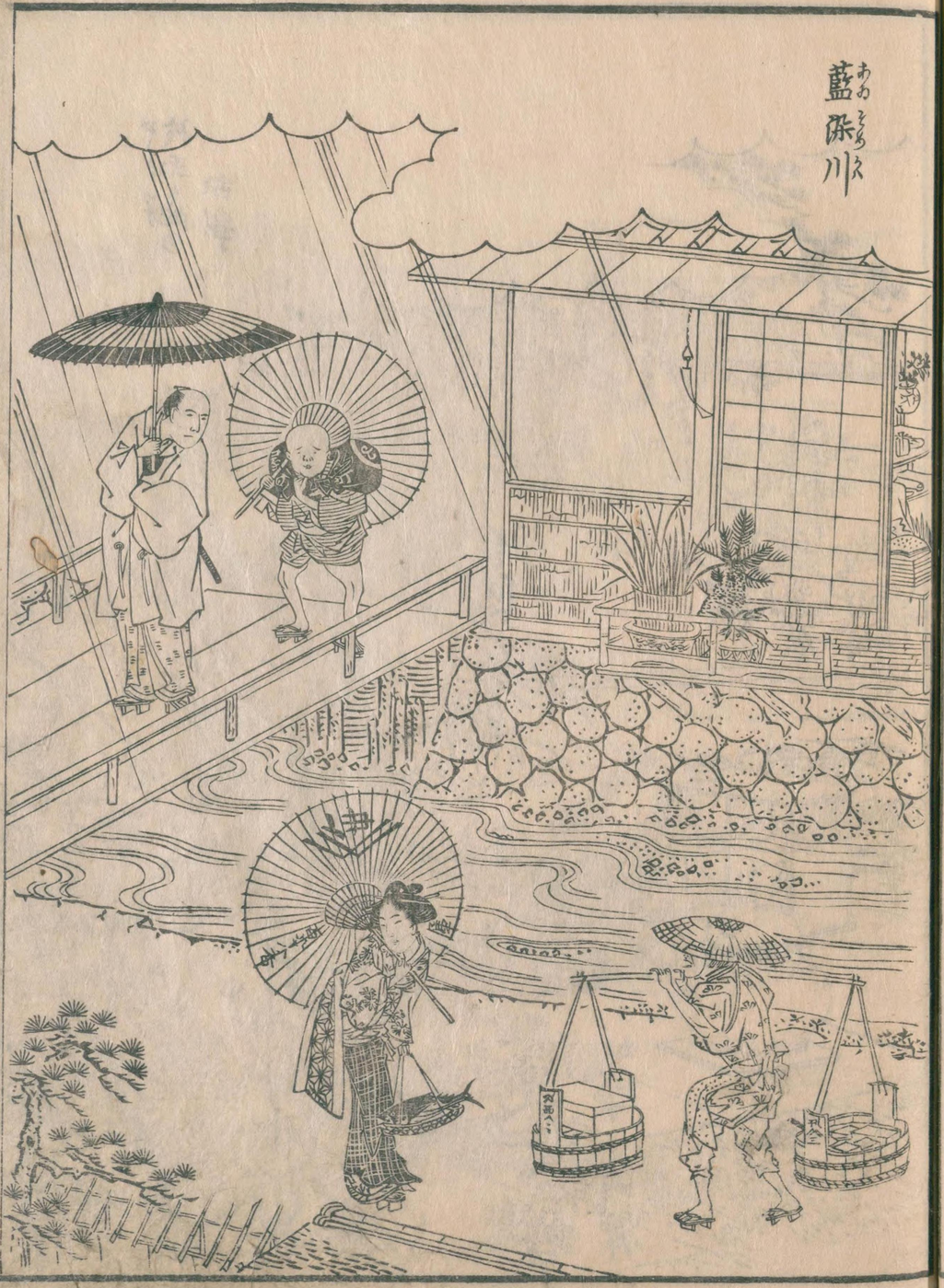
ガラス使用





国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用



藍染川

其頃此辺の風呂屋ハ湯女を置て客を招しより又六法組と
て武夫やもあり壮年の俠夫大小立髪の異風なる出立かゝ
此風呂屋の辺を徘徊せしハ是を丹前六法風と呼なる
今も此地ハ清水屋堀川杯云湯屋あり則昔の湯女風呂
ゆしくしき頃ハ清水風呂堀川風呂と称へしとぞ
居ゆく狂言ハ取組名も丹前とぞ
白柄組鍔棒組唐犬組
荒羅組等なり

藍染川

神田鍛冶町の通を横ぎりくく東の方へ流る溝なり里
諺ハ一町ゆく南北の水落合此所ゆく會流る故ハ
逢初と云の儀ハとぞ云又紺屋町の辺を流る故ハ藍染川と
云とぞ

此溝の端鍛冶町の裏の小路ハ
庵室あり本ぞを頬焼茶師と字ハ此本ぞる昔千葉助
常胤の侍女ハ代ぐく自ら
頬を焦しかひせり

於玉ヶ池

舊名を櫻ヶ池と云今神田松枝町人家の後園ハ於玉
稲荷と称する小祠あり里諺ハ云於玉ヶ霊を鎮ると其傍ハ

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

於玉ヶ池の古事

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

弁慶橋

少しく井のあき形残れり昔の池の余波なりとぞ

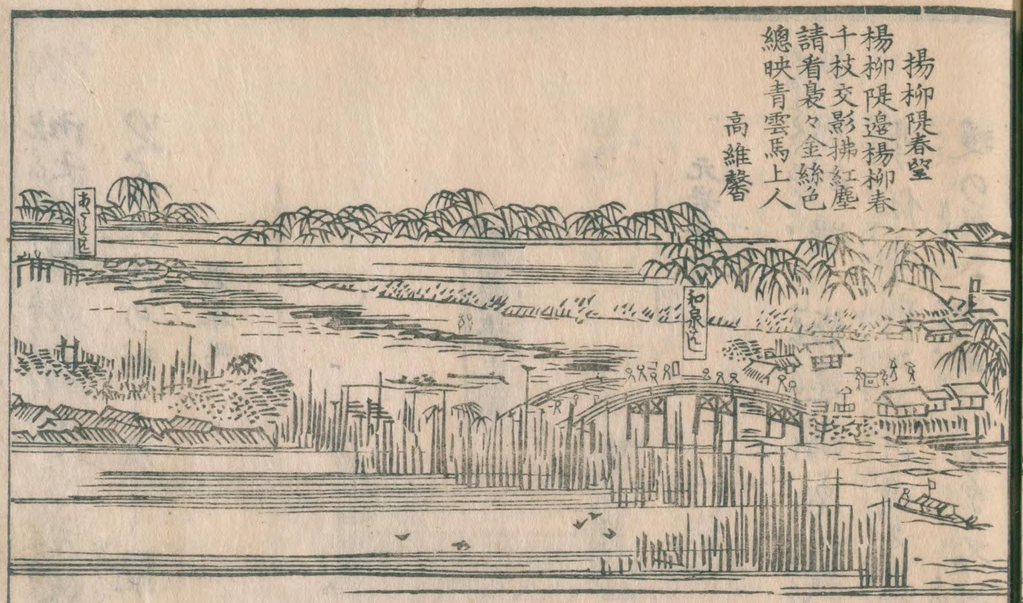
池なりしが江戸の繁昌よりそこかくのことくうめ埋滅しぬ里老傳云昔此地ハ奥州への通路ゆゑ櫻樹あまた植りて池なる水ハ櫻ヶ池とよべりとそ其傍の櫻樹のもとふる玉とゝなる女ゐ居て往来の人ゟ茶をもとむ容色大そうつくしかりければなりきとなん中頃人うゝも品形も拙くさまある男二人を彼女ゟ心を通ハせるされハ切なる方ゟ思へともいつも捨られまゝなりもあるされハ我身のうへを思ひあつらひて女ハ終ゟ此池ゟ身を投むまくなりぬさるゆゑ津の國の求塚の古事ゟ似たりともあそれるまじハとて辺ゟ埋みたるしるしとて柳を植て記念の柳とハ号ると云其蹟址明暦の回録ゟ七ひろ池ゟ今ハ名のみを存せりこの邊ゟ池とゝ呼ぶ

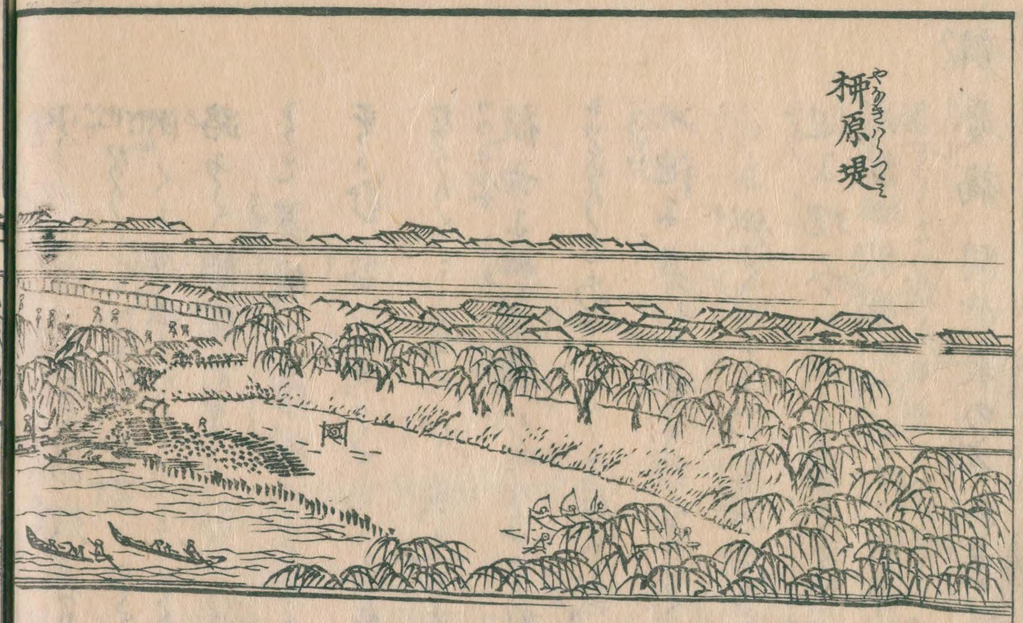
辨慶橋　同所東の方和泉橋の通藍染川の下流ゟ架す其始

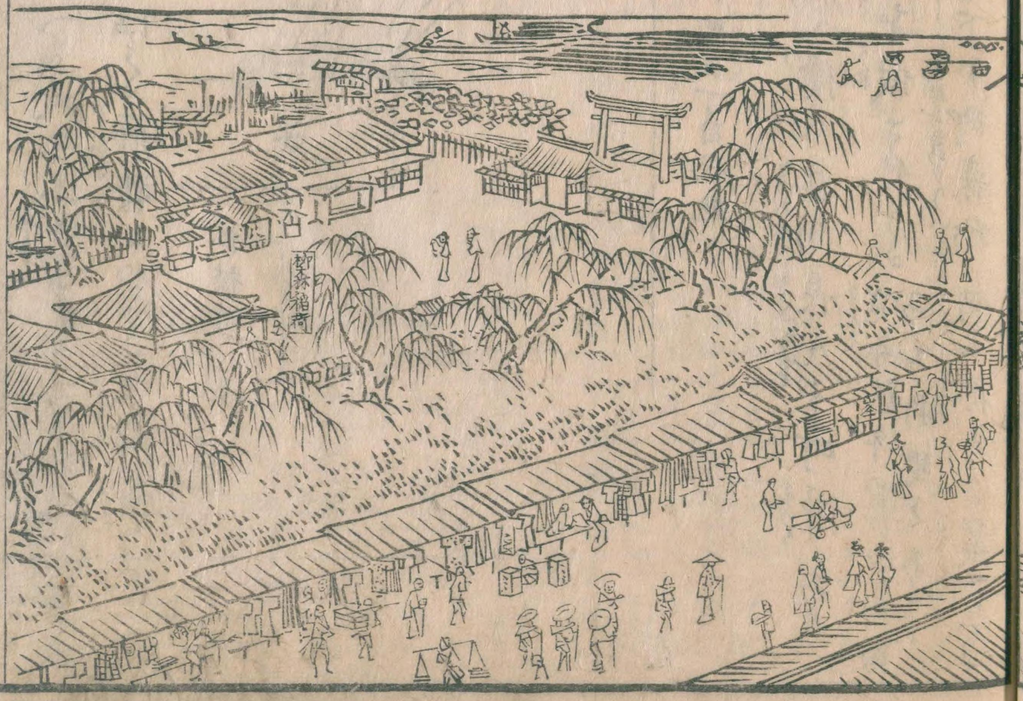
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

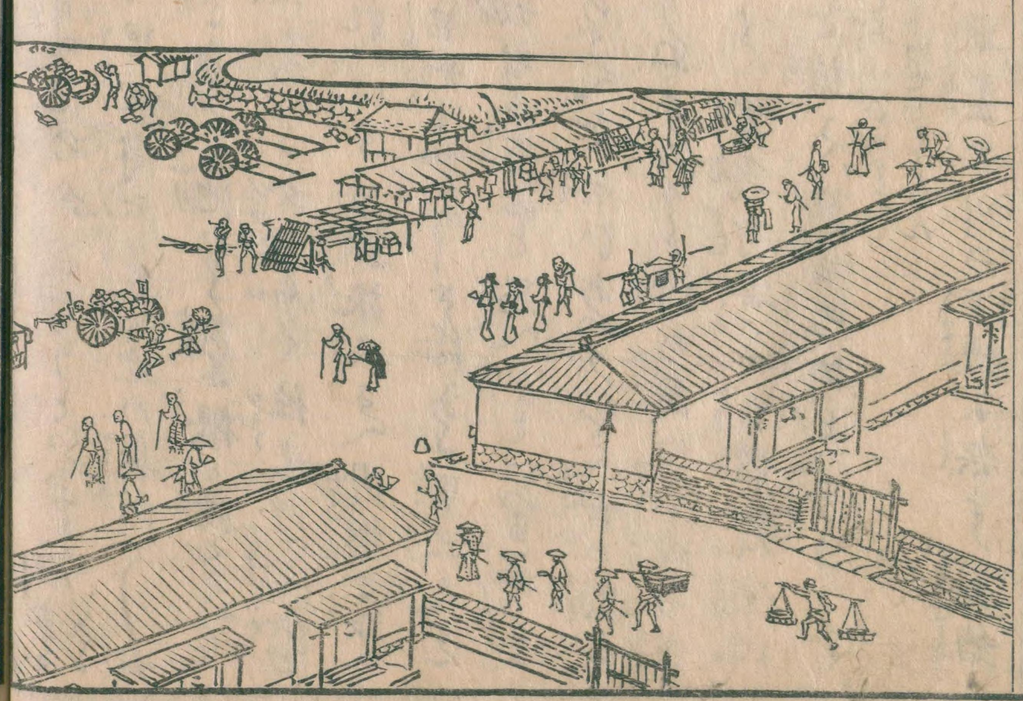
楊柳隄春望

楊柳隄邊楊柳春
千枝交影拂紅塵
請看裊々金絲色
總映青雲馬上人
高維馨





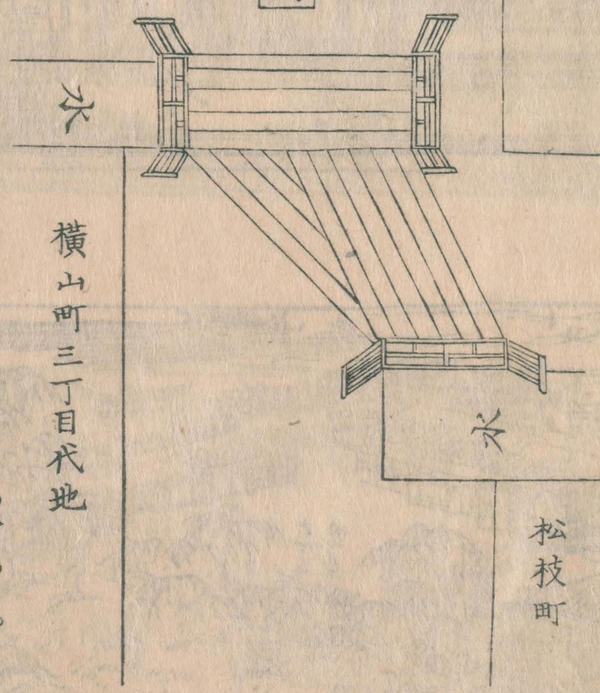




国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

辨慶橋之圖



此大工棟梁辨慶小左衛門といへる人の工夫よりかゝりしと云傳へ此地の形よく應じ勾欄を横切りて筋替よりかゝる尤奇なり

懸初の事は詳ならず

柳原封壇　筋違橋より浅草橋へ續く其間長凡十町斗あり

享保年間此所の堤ふ悉く柳を栽させらるゝ　寛永十一年の江戸繪図にも柳堤とあり

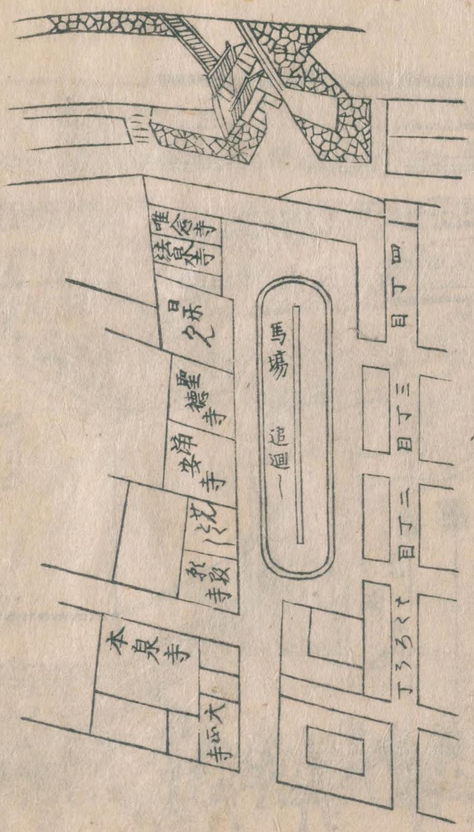
堤の外ハ神田川なれど又此堤の下ゟ柳森稲荷と称する叢祠あり

故よ此地を稲荷河岸と呼へり

馬場　馬喰町三丁目の西北の裏通よりあり　江戸馬場の中最も古し

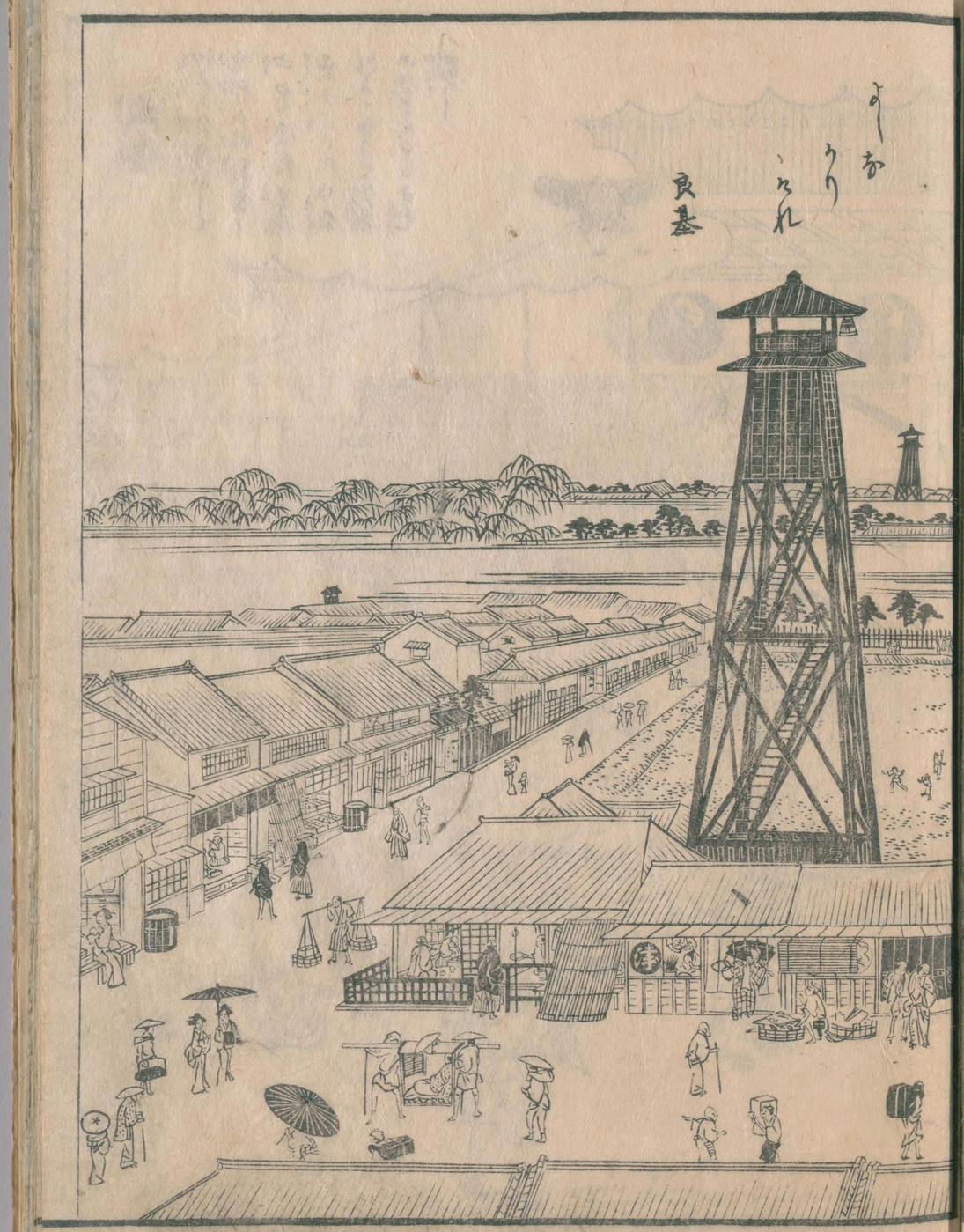
慶長五年関ヶ原御陣の時御馬揃ありしと云傳へ

御馬工郎高木源兵衛是を預りまるなりしとそ　寛永十年開拓のあつまやりとて此地を馬喰町となせるなり　昔ハ冨田半七と高木源兵衛と両人侍あつて草紙を未ハ馬喰町とて皆々鹿毛の馬もありあるひハ月毛鹿毛追廻しとて左のかた形のごとし　寛永明暦延宝の江戸繪図よりうつせり



浅草橋　神田川の下流浅草御門の入口よ架せ此所ゟ御高札を建

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用



良基

馬喰町馬場

博勞憲

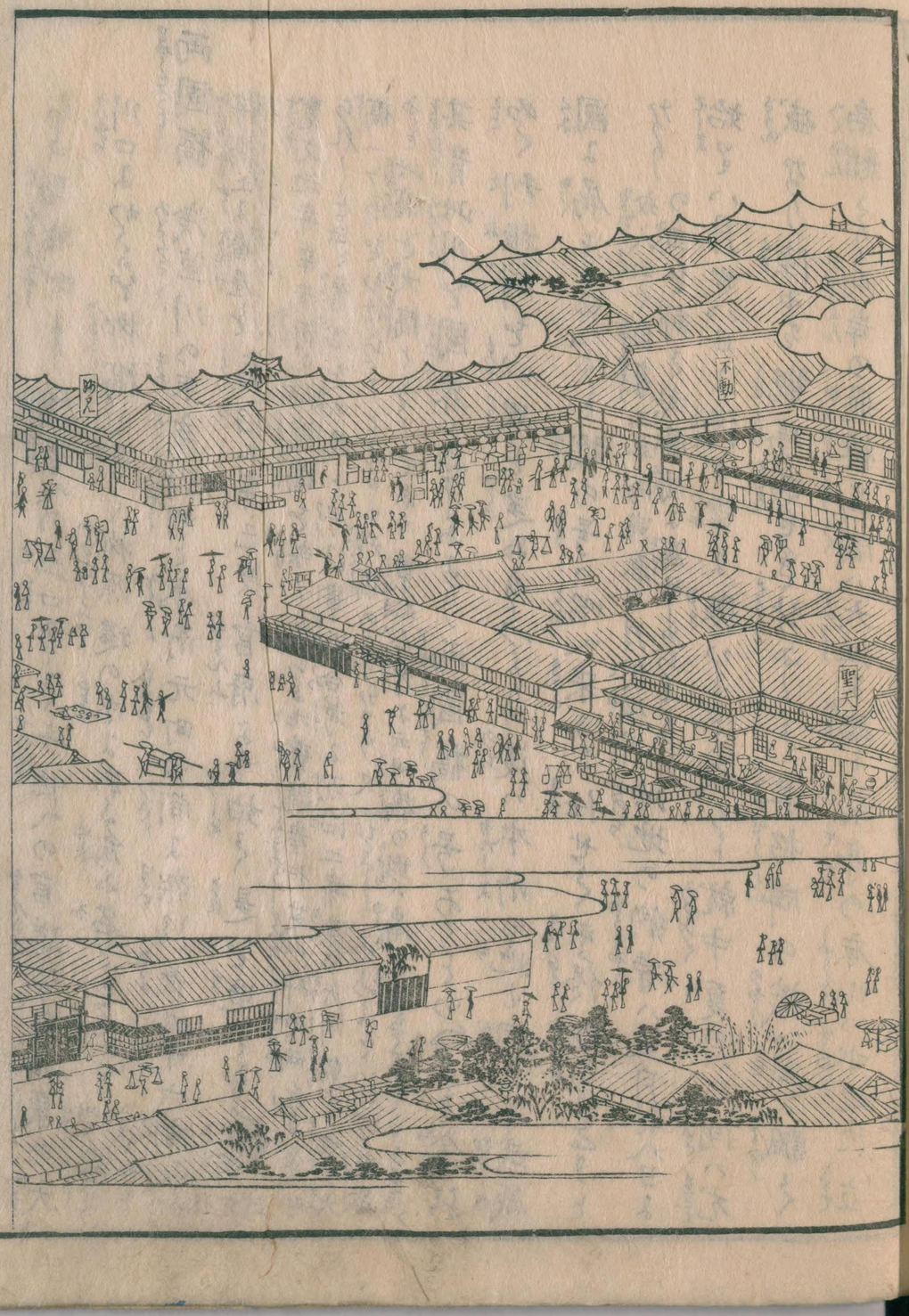
鶴岡放生會職人奇合

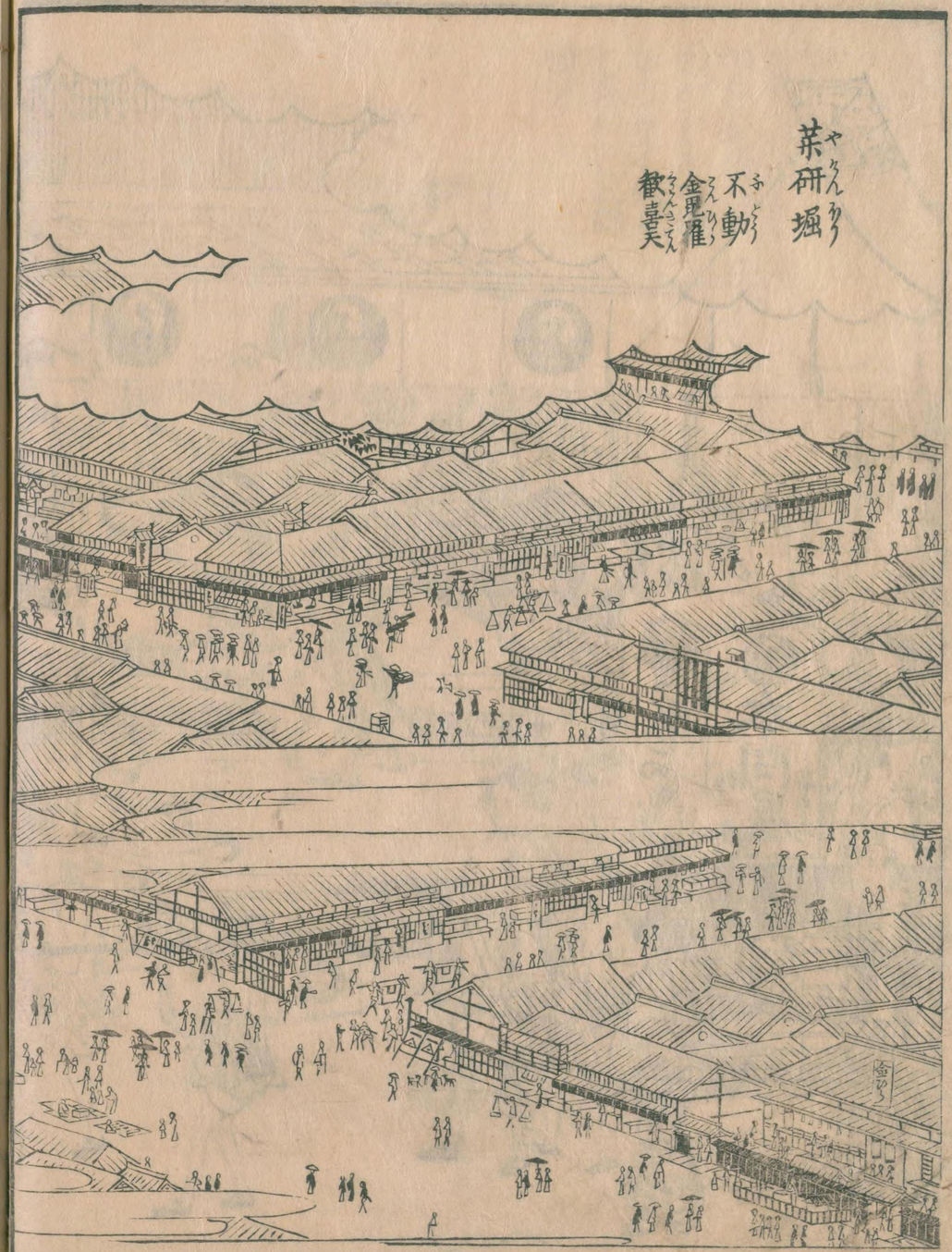
国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用





茅研堀
不動
金毘羅
歓喜天

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

124
20
114

らる馬喰町より浅草への出口みち芝千住への官道なり此東の大川口よりかゝるを柳橋と号く柳原堤の末にある家ふ名とそ

両國橋　浅草川の末吉川町と本所元町の間に架く長九十六間橋の前後に假橋高上より番屋を葛治二年己亥官府より始めて是を造ら令むる寛文元年辛丑新に両國橋を架しめらるゝ故に普請奉行芝山平内両氏より命せられしと云ふ舊名を大橋と号く事跡合考に方治二年東の大川筋より始て大橋一ケ所をかけらるゝとあるも此橋のことなり又諸方への貨船の事跡合考に云此橋の形ハ扇を開きたるごとくなるを以て号くと云ふ

其昔此川を國界とせしより両國橋の号ありといへども今ハ本所の地も同く武蔵國に屬せるを以界と定めんより橋の号ハ唱へ来るまゝ任せ改らるゝ事ハなし

貞享三年丙寅春三月利根川筋此地の納涼ハ五月廿八日より始て八月廿八日を終る常ハ賑ふといへども就中夏月の間ハ尤盛なり陸ゆも觀場不せき汁おしく其招牌の幟ハ風を飄く扁飛ゝり両岸の飛樓高閣ハ大江を臨み茶亭の床几ハ水辺に立

国立国会図書館　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114
ガラス使用

124
20
114

国立国会図書館　　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用

国立国会図書館　　タイトル『江戸名所図会 7巻』 請求記号 124-114

ガラス使用